和歌山市文化体育振興事業団調査報告書　第20集

太田・黒田遺跡 第43次発掘調査概報

1998

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

序　文

遺跡の立地する和歌山市は、和歌山県の北部に位置し、奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川によって運ばれた土砂により形成された和歌山平野を中心とした地域であります。また、太田・黒田遺跡の周辺には鳴神遺跡群、秋月遺跡など著名な遺跡が集中しており、当地域は和歌山市の歴史を考える上で大変重要な地域であるといえます。

今回の調査の結果、遺跡の北部で弥生時代の竪穴住居・大溝、古墳時代の大溝などの重要な遺構が検出され、太田・黒田遺跡の一端を明らかにすることができました。

調査は当財団が平成10年１月から２月までの期間で行い、ここに概要報告書をまとめたものです。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査に御協力をいただいた土地所有者の井上タヨネ氏及び関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成10年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

理事長　木下　正昭

例　言

1．本書は、井上タネヨ氏が和歌山市黒田157－１番地に計画した共同住宅建設工事に先立つ発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、井上タネヨ氏の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積約250m²を1998年１月12日から２月26日までの期間で実施した。

3．発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会

教育長	坂口全彦
文化振興課長	志岐忠一
文化財班長	小松靖甫
学芸員	前田敬彦

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長	木下正昭
事務局長	竹尻圭吾
総務課長	別院　稔
事務員	奥野勝啓（調査庶務担当）
学芸員	北野隆亮（発掘調査担当）
学芸員	木建正宏（　〃　）
学芸員	吉田綾子（　〃　）

4．遺跡・遺構及び本概報掲載の遺物写真撮影は北野、木建のほか同財団学芸員井馬好英・高橋方紀が分担して行った。

5．本書の執筆は発掘調査担当の北野のほか同財団学芸員井馬、奥村薫、高橋が分担し、編集は北野が行った。なお、「３.太田・黒田遺跡の既往の調査」については前田敬彦（和歌山市教育委員会）が執筆した。各執筆分担の文責は目次に示した。

6．写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

7．概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1．調査の契機と経過……（北野隆亮）……1

2．位置と環境……（井馬好英）……2

3．太田・黒田遺跡の既往の調査……（前田敬彦）……4

4．調査の方法と経過……（北野）……6

5．遺構

（1）弥生時代の遺構……（北野、井馬、高橋方紀）……9

（2）古墳時代の遺構……（井馬）……12

6．遺物

（1）弥生時代の遺物……（井馬）……13

（2）古墳時代の遺物……（奥村　薫）……18

（3）石　　器……（高橋）……21

（4）石 製 品……（高橋）……24

7．まとめ

（1）出土石器の検討……（高橋）……24

（2）太田・黒田遺跡検出の竪穴住居について……（井馬）……26

（3）古墳時代の大溝ＳＤ－９について……（北野）……27

報告書抄録……28

図版目次

図版１　調査地近景（東から）、調査地近景（上が北）

図版２　全景（上が北）、全景（西から）

図版３　SB-1（上が北）、SB-1（北から）

図版４　SB-3（南から）、SB-4（南から）

図版５　SD-6（南西から）、SD-6土層堆積状況（南西から）

図版６　SD-9（南西から）、SD-9土層堆積状況（西から）

図版７　SD-8土層堆積状況（東から）、SX-1土器検出状況

図版８　調査地東側SK-1周辺（上が北）、SK-1土層堆積状況（西から）

図版９　出土遺物 SB-2、SB-4

図版10　出土遺物 SB-3

図版11　出土遺物 SD-8、SD-6、SK-10、P-106、P-32、SK-6、SK-11

図版12　出土遺物 第８層、SK-1、SX-1、SK-6、SD-9

図版13　出土遺物 石鏃、石槍状石器、石錐、スクレイパー

図版14　出土遺物 石包丁、太型蛤刃石斧、石杵、管玉、叩石、凹石、砥石、不明棒状石製品

1．調査の契機と経過

井上タネヨ氏が和歌山市黒田157－1番地に計画した共同住宅建設用地が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』（1996年3月発行）に記載された太田・黒田遺跡（遺跡番号327）の範囲内に相当することから、和歌山市教育委員会が指導を行い、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて発掘調査を実施する事となった。調査地は、標高約3.7mを測る沖積平野上にあり、太田・黒田遺跡の北端部に位置する（第1図、図版1）。

周辺の調査については、1994年に調査地南西側約50m地点で第23次調査が、また同年に調査地南東側約150m地点で第24次調査が本財団により行われている。

第23次調査では古墳時代後期の溝、弥生時代中期の土坑などが、第24次調査では弥生時代中期の溝・土坑・壺棺などが検出された。また、第24次調査地の南約50m地点の黒田公園で1970年に銅鐸（外縁紐式）が出土している。以上のことから、調査地周辺部では弥生時代から古墳時代の遺構が展開していたことが明らかにされている。

調査は1998年1月12日から同年2月26日までの期間で実施した。

第1図　調査位置図

2．位置と環境

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境として大阪府泉南郡岬町・阪南市、東は和歌山県那賀郡岩出町・貴志川町、南は海南市に隣接し、西は紀伊水道に面している。

本市のほぼ中央を西流する紀ノ川は、奈良県の大台ヶ原に源を発する全長136㎞の河川である。この紀ノ川による堆積作用によって形成された沖積平野が和歌山平野である。今回調査を行った太田・黒田遺跡は、紀ノ川南岸の平野域でも微高地にあたる地点であり、多くの遺跡が分布する地域である（第２図）。

次に周辺の遺跡を概観すると、まず縄文時代では東1.5㎞に位置する鳴神貝塚（35）がある。この貝塚は、国の史跡に指定されている遺跡で、縄文時代中期から晩期にかけての土器が多数発見されており、晩期の土器に伴って弥生時代前期の土器が出土している点で縄文時代から弥生時代に移行する状況が認められるものである。

弥生時代になると遺跡の数は増し、平野部に集落が展開するようになる。弥生時代前期に始まる集落では、今回の調査地でもある太田・黒田遺跡（１）がよく知られるところである。この遺跡は、前期から中期にかけての県内最大規模の集落跡として知られ、竪穴住居や土壙墓、井戸などの遺構、銅鐸や多量の壺、甕などの弥生土器が検出されている。中期から後期にかけての集落跡では紀ノ川北岸の宇田森遺跡や北田井遺跡（23）などがあり、円形の竪穴住居跡などの遺構が検出されている。

古墳時代では弥生時代に続き平野部に集落が営まれている。当遺跡の東側に位置する鳴神遺跡群では、多数の方形竪穴住居跡が検出されているほか、秋月遺跡（30）では埋没した前期の前方後円墳が見つかっている。このような墓域は、平野域の集落の周辺に築造されていたものが、周辺の岩橋山塊などの山麓にも広がり、のちには岩橋千塚古墳群（44）などの大規模な古墳群が形成される。また生産遺跡では近年の調査で中期から後期にかけての大規模な製塩遺跡として知られることとなった西庄遺跡が北西約10㎞に位置する。

歴史時代になると、当遺跡から東700ｍに位置する秋月の地に鎮座する日前・国懸神宮の起源説話が「日本書紀」に記され、またこの周辺は紀ノ川右岸の条里制の土地区画割りが良好に残る地域としても知られている。奈良時代から平安時代にかけての遺物は、鳴神遺跡群の発掘調査において多く出土しており、日前・国懸神宮の周辺は注目される地域の一つであるといえる。

太田・黒田遺跡に重複する太田城跡（２）は、豊臣秀吉の紀州攻めによる太田城の水攻めがよく知られるところである。しかし、当時の太田党に関わる史料は、江戸時代の文献にわずかに残るのみで城の位置を含め正確な情報は伝わっていない。残る史料によると、太田城は、東西二町半（約273m）、南北二町（約218m）、まわりに堀をめぐらした城館であったものとみられる。現在、この周辺には「城跡」などの小字名を残すのみである。また水攻めに関しては、和泉・紀州両国の百姓を動員し、紀ノ川田井ノ瀬から出水を通る五三町（約5.8km）に堤防を築き、宮井・小倉井の用水を引き入れたとされる。この堤防については、出水の堤跡（３）がその時の残存のものであるといわれている。また、近年の太田・黒田遺跡の発掘調査において幅10m、深さ３ｍを測る中世の大溝が発掘され、太田城と何らかの関わりをもつ遺構として注目されている。

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	太田・黒田遺跡	弥生～近世	21	田屋遺跡	弥生～古墳	41	井辺II遺跡	弥生～古墳
2	太田城	安土・桃山	22	西田井遺跡	弥生～中世	42	井辺I遺跡	弥生～古墳
3	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	23	北田井遺跡	弥生～古墳	43	大日山I遺跡	古墳～奈良
4	平井遺跡	弥生～奈良	24	本願寺跡	中世～	44	岩橋千塚古墳群	古墳
5	大谷古墳	古墳	25	鷺ノ森遺跡	弥生～古墳	45	井辺遺跡	弥生
6	楠見遺跡	古墳	26	和歌山城跡	近世	46	神前遺跡	弥生
7	国有本遺跡	弥生～古墳	27	友田町遺跡	弥生～平安	47	井辺前山古墳群	古墳
8	鳴滝遺跡	古墳	28	木広町遺跡	弥生	48	和田古墳群	古墳
9	鳴滝古墳群	古墳	29	鳴神VI遺跡	弥生～江戸	49	和田岩坪遺跡	弥生～古墳
10	有本銅鐸出土地	弥生	30	秋月遺跡	弥生～平安	50	和田II遺跡	弥生
11	法然寺遺跡	弥生	31	鳴神V遺跡	弥生～平安	51	和田遺跡	弥生
12	西辻遺跡	弥生	32	鳴神IV遺跡	弥生～江戸	52	寺内古墳群	古墳
13	六十谷遺跡	縄文～弥生	33	音浦遺跡	古墳	53	山東古墳群	古墳
14	和田遺跡	弥生～古墳	34	鳴神III遺跡		54	吉礼III遺跡	弥生
15	川口遺跡	弥生～古墳	35	鳴神貝塚	縄文～弥生	55	吉礼貝塚	縄文
16	直川遺跡	縄文	36	花山古墳群	古墳	56	西吉礼遺跡	弥生
17	高井遺跡	縄文	37	栗栖I遺跡	古墳	57	東吉礼遺跡	弥生
18	紀の川銅鐸出土地	弥生	38	津秦遺跡	弥生	58	千石山遺跡	弥生
19	府中IV遺跡	弥生～古墳	39	津秦II遺跡	古墳～奈良	59	城ヶ森遺跡	弥生
20	府中II遺跡	弥生	40	鳴神II遺跡	弥生～平安	60	馬場遺跡	弥生

第２図　太田・黒田遺跡周辺の遺跡分布図

3．太田・黒田遺跡の既往の調査

太田・黒田遺跡は、ＪＲ和歌山駅の東側に広がる大規模な複合遺跡である。本遺跡は、昭和43（1968）年の調査以来40次を越える調査が実施され、調査成果が蓄積されつつある。既往の調査のうち第１～25次調査の位置と概略については『太田・黒田遺跡　第26次発掘調査概報』に、また第26～32次調査の位置と概略については『太田・黒田遺跡　第33・34次発掘調査概報』にそれぞれ記載がある。よって、ここでは第35次以降の調査位置と概略について記述するものとする（第３図）。

第35次調査　1996（平成８）年６月に和歌山市教育委員会が、遺跡推定範囲の東端の和歌山市太田538－20番地において、個人住宅の建設に伴い建物基礎部分の確認調査を実施した。調査面積は４m^2である。表土下50～60cmで厚さ５～10cmの中世包含層とその下面において直径約50cmの土坑が検出された。土坑内より瓦器・土師器・白磁が出土した。

第36次調査　1996（平成８）年８～９月に和歌山市文化体育振興事業団によりマンション建設に伴い約80m^2が調査された。調査地は和歌山市黒田134－６番地で遺跡推定範囲の北端に相当する。弥生中期の包含層や東西方向の古墳時代の溝が検出された。

第37次調査　1996（平成８）年11～12月に和歌山市文化体育振興事業団により事務所建設に伴い発掘調査された。調査地は和歌山市太田422番地、調査面積は20m^2である。標高２m付近で弥生中期の包含層が形成され、その土層を掘り込んで鎌倉時代の溝状遺構が形成されている。

第38次調査　1997（平成９）年１月に和歌山市教育委員会により医院建築に伴い発掘調査が実施された。調査地は和歌山市太田375－１番地、調査面積は約15m^2であった。近世以降の耕作に伴う鋤溝群が検出されたが、その下層においても遺構面は確認されなかった。

第39次調査　1997（平成９）年２～３月に個人住宅の建て替えに伴う国庫補助事業として和歌山市文化体育振興事業団により実施された。昭和43～46年の調査会組織による発掘調査地点の一画に相当し、その際の未掘部分を含めての再調査となった。標高2.6m前後で弥生中期の土坑３基、溝状遺構１基、近世の土坑２基が検出された。

第40次調査　1997（平成９）年５月～６月に和歌山市文化体育振興事業団により事務所建設に伴い発掘調査が実施された。調査地は和歌山市太田442番地、調査面積は160m^2である。標高2.6m前後が弥生中期から古墳後期の遺構面で、明確な遺構としては古墳時代後期の溝がある。また、それらの遺構面の下層より弥生中期の植物痕跡が検出された。

第41次調査　1997（平成９）年６月～８月に和歌山市文化体育振興事業団により事務所建設に伴い発掘調査された。調査地は和歌山市太田423－4番地、調査面積は140m^2である。標高2.5mで弥生時代から江戸時代の遺構が検出された。主な遺構としては弥生時代の溝、平安時代の溝がある。

第42次調査　1997（平成９）年９月に和歌山市教育委員会が道路敷設に伴い発掘調査をおこなった。調査地は和歌山市黒田136番地先、調査面積は50m^2である。遺跡推定範囲の北端である。江戸時代の土坑や弥生時代中期の溝が検出された。

参考文献
『太田・黒田遺跡　第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995年
『太田・黒田遺跡　第33・34次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1996年

第３図　既往の発掘調査区域（黒塗部分は主たる調査地、斜線部分は調査対象地を示す）

4．調査の方法と経過

（1）調査の方法

調査は、1998年1月12日から2月26日の期間で、共同住宅建設工事予定範囲内において、東西約31m、南北約8m、面積約250m²の調査区を設定し、実施した。

調査は、機械力によって旧地表面である第1層（水田耕土）から第6層（中世遺物包含層）までを掘削し、第7層以下を人力により掘削した。

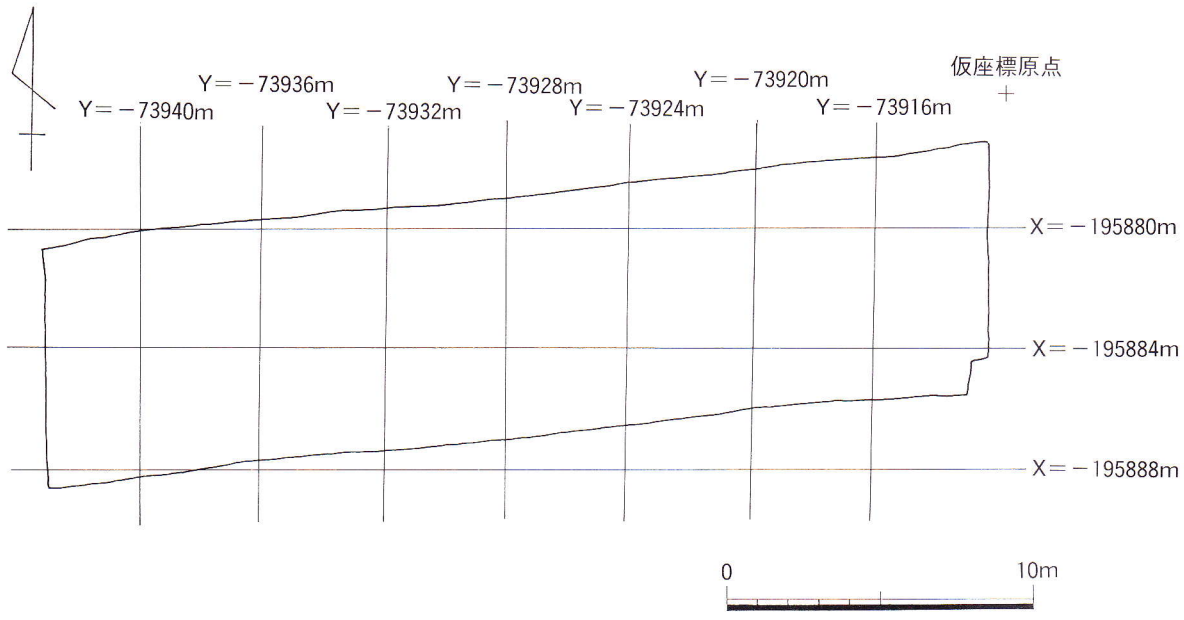
第6層以下の遺物包含層の遺物取り上げは、国土座標軸の整数値に合致した4m×4mのメッシュ杭を打ち、地区設定を行った（第4図）。調査区北東外に地区設定のメッシュ杭の値に合致した仮座標原点を設定し、南方向にS、西方向にWを冠し、4m単位（S8W4など）の値を杭に記入し、遺物の取り上げは北東の杭の値をもって地区名とした

土層の色調及び土質観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。遺構平面実測図及び壁面土層堆積状況図については1/20の縮尺で全て手実測で実施した。なお、遺構内の遺物出土状況図及び特殊遺構については1/10の縮尺で実測図を作成した。遺跡の水準は和歌山県水準点を基準とした。

遺構等の写真撮影は随時行ったが、最終的な全景写真等についてはラジコンヘリによる航空撮影を実施した（図版2）。

（2）調査の概要

調査地の基本的な土層堆積状況について、地表面の標高は調査地北側では東西に水平に標高2.60mを測るが、南側においては標高2.70mを測り北側より高くなっている（第5図）。現地表である水田耕土（第1層・5Y4/1(灰)粗砂混シルト）が約20cm、床土（第2層・10YR5/3(にぶい黄褐)シルト）が約5cmの厚さで堆積する。その下の堆積は、旧耕土とみられる堆積の第3層（2.5Y5/2



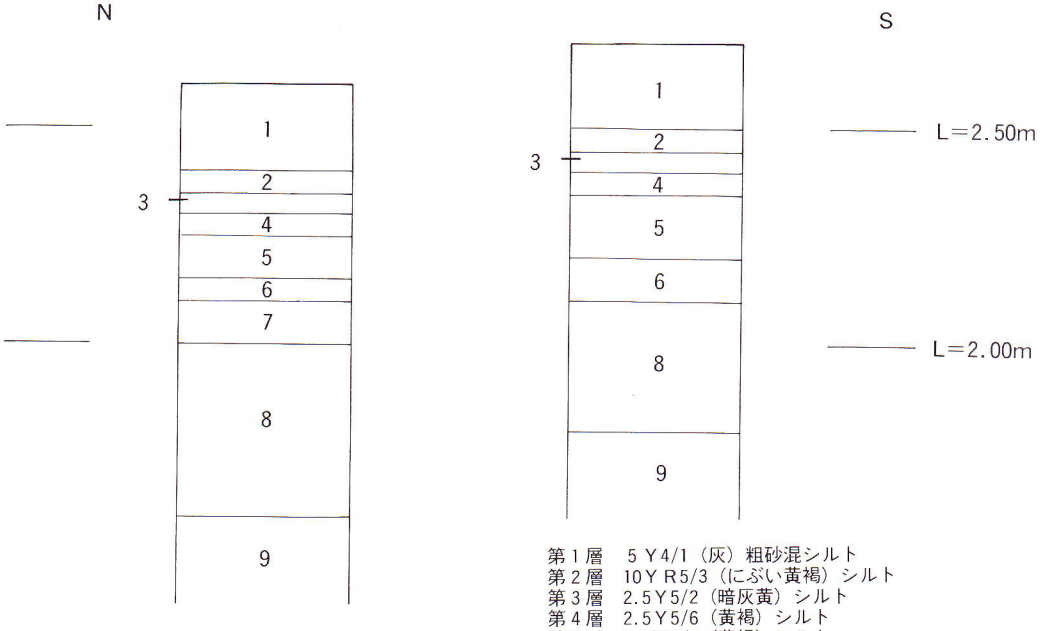
第4図　調査地区割図

(暗灰黄)シルト）が約５cm、その床土に相当するとみられる第４層（2.5Y5/6(黄褐)シルト）が約５cm堆積する。さらに第５層（2.5Y5/4(黄褐)シルト）が10～15cm、第６層（10YR5/8(黄褐)粗砂混シルト）が５～10cmの厚さで堆積する。以上の堆積はいずれも南側が北側より約10cm高く堆積したものである。北側に第7層（10YR4/6(褐)粗砂混シルト）が約10cmの厚さで堆積するが、この層は南側にはみられない。その下の第８層（2.5Y4/1(黄灰)粗砂混シルト）は北側で約40cm、南側で約30cmの厚さで堆積している状況を観察した。その層の上面においても南側が北側より約10cm高く堆積する。第９層（2.5Y4/2(暗灰黄)粗砂）は20cm以上の厚さで堆積しており、上面の比高は南側が北側より約20cm高く堆積するものである。

遺構面は第７層上面と第８層上面の２面あり、それぞれ鎌倉時代と弥生時代中期から古墳時代までの時期のものである。出土遺物から第７層は古墳時代後期以降のもので、第８層は詳細な時期は不明ながら少量の弥生土器を含む。第９層は遺物の出土がみられなかったことから無遺物の自然堆積層とみられ、過去の地震のため液状化した状況を示す層でもある。

以上の土層堆積状況から調査地北側では東西にほぼ水平堆積をするが、南側においては各堆積層が北側に比べ10cm程度高く堆積することを明らかにすることができた。さらに、平面的にみた場合、SD－９付近を傾斜変換点とした等高線のラインを推定することができ、調査地において北西方向に微低地、南東方向に微高地が弥生時代から古墳時代にかけて展開したことを明らかにすることができた。

遺構については第８層上面の弥生時代中期遺構面では、竪穴住居４棟、大溝１条、土器棺１基、土坑・ピット、古墳時代の大溝１条（SD－９）などを、第７層上面の遺構面では、鎌倉時代のSD－１～４を検出した。



第１層　５Y4/1（灰）粗砂混シルト
第２層　10Y R5/3（にぶい黄褐）シルト
第３層　2.5Y5/2（暗灰黄）シルト
第４層　2.5Y5/6（黄褐）シルト
第５層　2.5Y5/4（黄褐）シルト
第６層　10Y R5/8（黄褐）シルト
第７層　10Y R4/6（褐）粗砂混シルト
第８層　2.5Y4/1（黄灰）粗砂混シルト
第９層　2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂

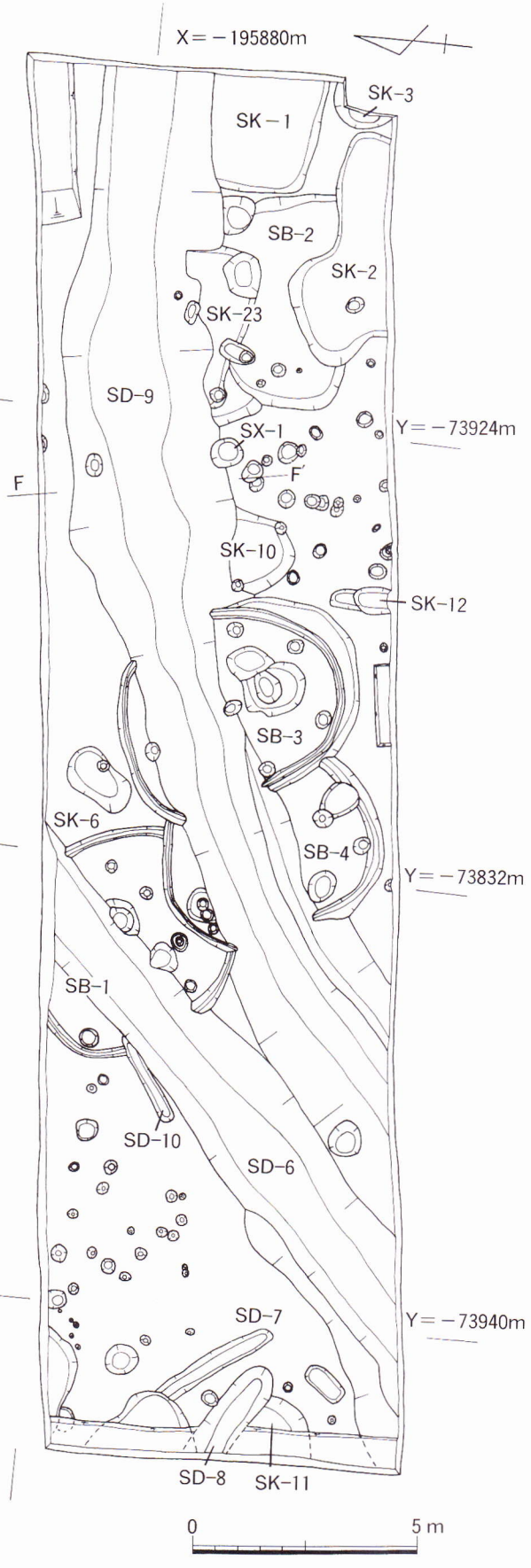
第５図　調査地土層柱状模式図

5．遺構

今回の調査における遺構検出面は、第７層の上面と第８層上面の２面である。

まず第７層上面の遺構は、調査区東端周辺において検出した小溝３条（SD－１～３）と調査区中央やや西寄りで検出した小溝（SD－４）である。これらは幅30㎝程度、深さ10㎝前後を測るもので、南北方向の溝（SD－１・２）よりN－12°－Wの方向性がみられ、SD－３・４はこれに直交する方向性とみられる。またSD－２から瓦器片が出土していることから、少なくとも鎌倉時代もしくはそれ以降の小溝群と考えられる。

次に第８層上面遺構（第６図、図版２）は、弥生時代中期を中心とするものと古墳時代後期のものを検出した。このうち弥生時代のものは、竪穴住居、溝、溝状遺構、土坑、土器棺墓、ピットなどである。竪穴住居は調査区ほぼ中央部で３棟（SB－１・３・４）が重なりをもって検出したほか、調査区東端周辺において竪穴住居の可能性を残すものを４基（SB－２、SK－１・２・23）検出した。溝は調査区ほぼ中央から西側において、調査区を斜めに横切るものを１条（SD－６）検出した。また調査区西側において溝状遺構を３条（SD－７・８・10）検出した。このうちSD－８からは多量の弥生土器が出土しており、廃絶時に土器を投棄したものと考えられる。土坑は調査区ほぼ全面に散在する状況で10基検出した。これらの土坑からは畿内第Ⅲ様式から第Ⅳ様式併行期の遺物が出土しており、特にSK－６・10・11・12から一定量の出土をみた。土器棺墓は先述の二つの竪穴住居群の間において１基（SX－１）検出した。ピットは調査区ほぼ全面に約70個検出しており、このう



第６図　遺構全体平面図

ち42個のピットから畿内第Ⅲ様式から第Ⅳ様式併行期の遺物が出土している。これらのピットから弥生時代中期中葉から後葉にかけてのものとみられ、特に調査区中央部から東側に存在する比較的径が大きく、深掘されているものは掘立柱建物か竪穴住居に関するものの可能性が高いとみられる。

次に古墳時代の遺構は、溝１条、土坑１基である。溝は調査区東端ほぼ中央部から大きく弧をえがき調査区にそってのびるSD－９がある。この溝は幅3.5m前後を測る規模の大きなもので、６世紀代の須恵器や土師器が出土している。また土坑は調査区南東隅において検出したSK－３がある。

以下、重要とみられる遺構を時代ごとに説明する。

（１）弥生時代の遺構

［SB－２］　SB－２は調査区南東部において検出した遺構である（第６図）。平面プランは不定形であり東西幅4.8m、南北幅2.6m以上、深さ16cmを測るものである。検出状況から土坑の可能性も考えられる。覆土内からは畿内第Ⅲ様式の新段階に併行すると思われる壺等が出土している。

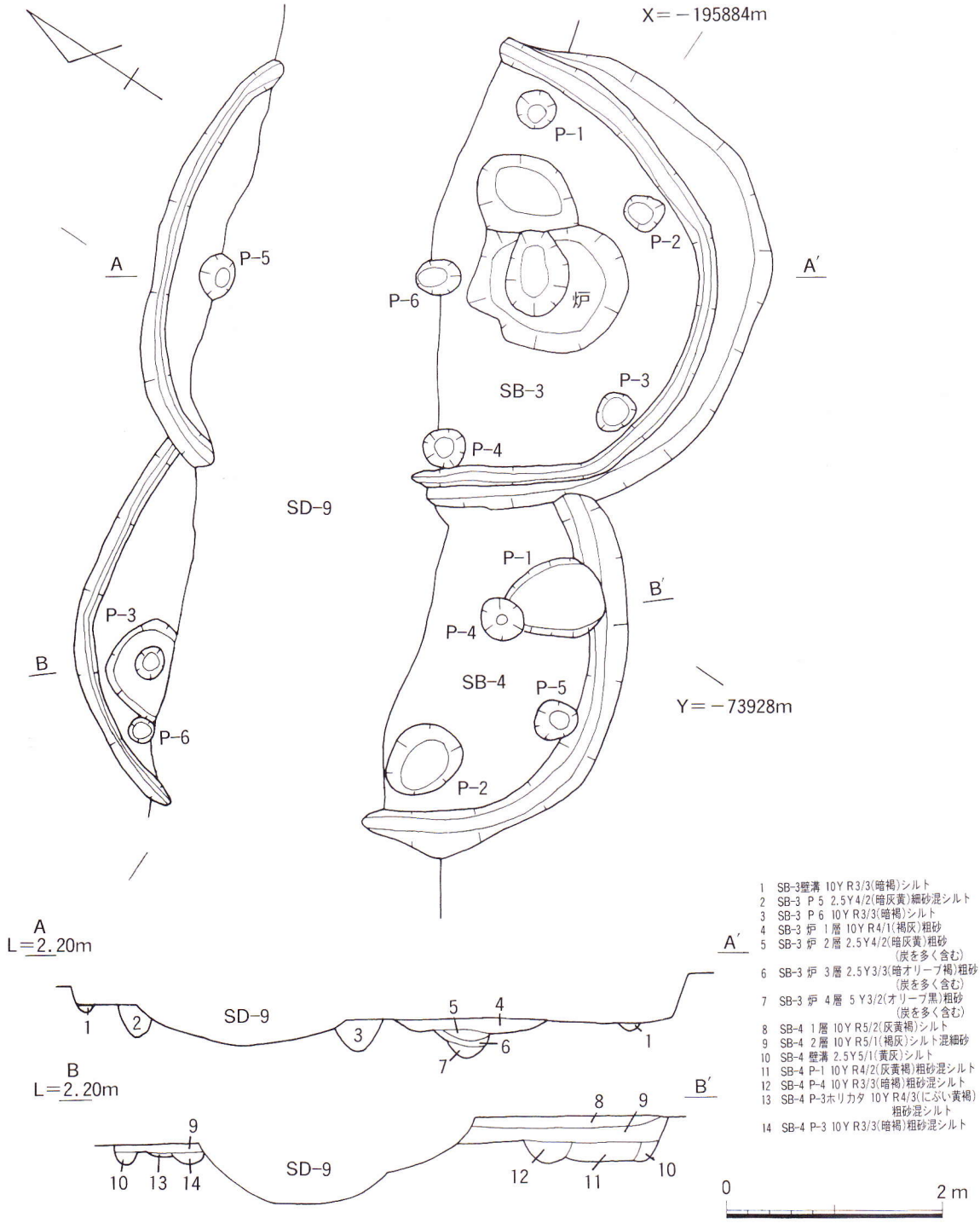
［SB－４］　SB－４は調査区ほぼ中央南側で検出した竪穴住居である（第７図、図版４）。中央よりやや北側をSD－９によって分断されている。SB－１と重なりをもつ。平面プランはやや楕円形で長径5.2m、短径4.5mの規模を復元できる。検出面から床面までの深さは22cmで、覆土は２層に分層できた。壁溝は幅30cm、床面からの深さ18cmの規模を測る。主柱穴はP－１～３であり、復元すると４～５本柱であったとみられる。

［SB－３］　SB－３は調査区ほぼ中央南側、SB－４の東側で検出した竪穴住居（第７図、図版４）で、中央よりやや北側をSD－９によって分断されている。平面プランはやや楕円形で長径5.7m、短径4.5mの規模を測る。検出面から床面までの深さは40cmであり、幅24cm、床面からの深さ８～10cmの壁溝が巡る。検出した柱穴は主柱穴と考えられ、復元すると周囲に７本、中央に１本の８本柱であったものとみられるが、拡張による建てかえが行われたことも考えられることから本来４本柱の住居であった可能性も残る。また、住居の床面中央部からやや南側では東西幅1.1m、南北幅1.4m、深さ36cmを測る炉を検出した。この炉の覆土は４層に分層でき、第２層以下には炭が多く含まれる。なお、住居の覆土及び柱穴からは打製石器及びサヌカイト剥片が多く出土している。

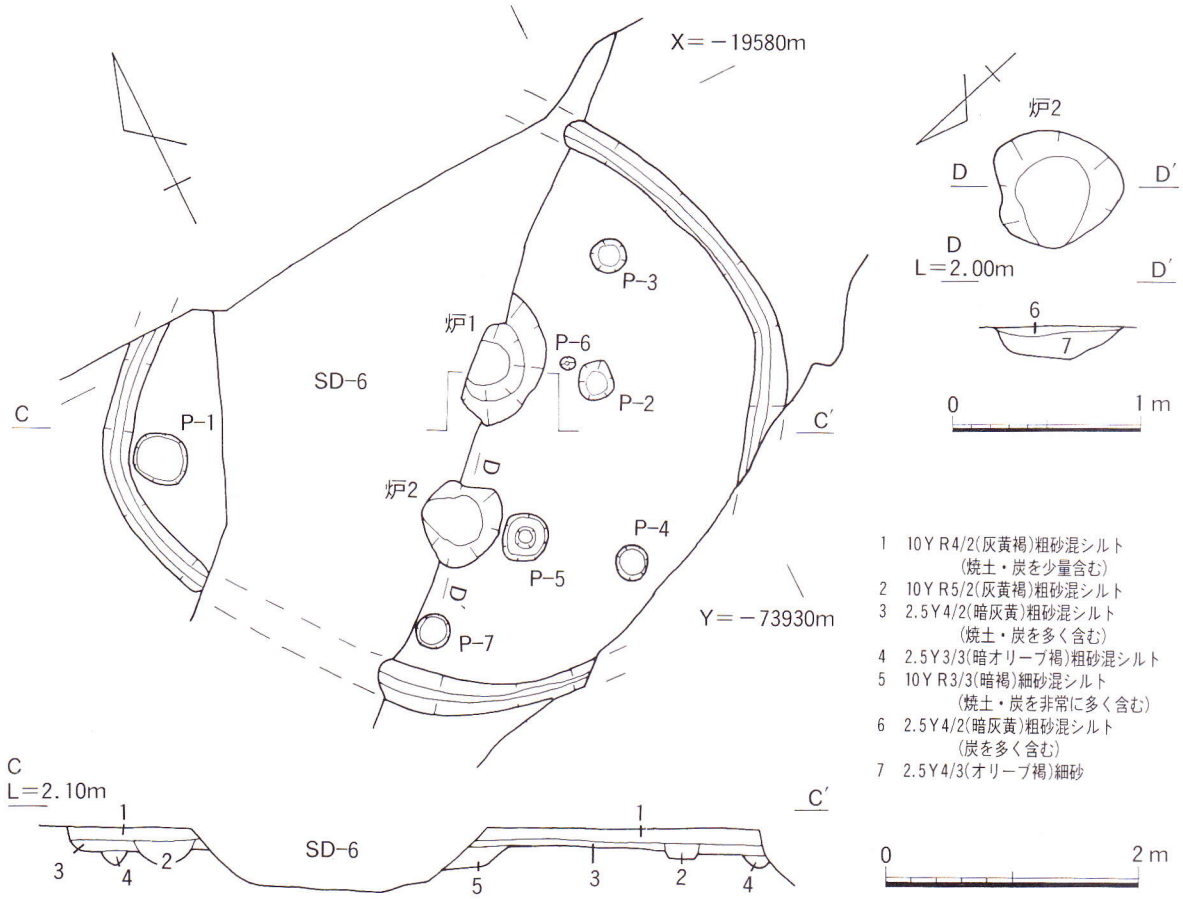
［SB－１］

調査区中央やや西寄りの北側で検出した竪穴住居（第８図、図版３）であり、中央部分をSD－６に分断されている。また、SB－１は南東に隣接したSB－４を切るものである。平面形は隅円方形であり、一辺4.8mを測るものである。検出面から床面までの深さ約20cmを測る。床面中央部と南西部壁との距離約１mにそれぞれ炉をもつものである。床面中央部の炉は直径約１m、深さ約20cmを測り、南西部のものは直径70cm、深さ約15cmを測るものである。床面中央部の炉については、底面に炭化物の薄い堆積が認められた。竪穴住居内の覆土は２層に分層することができた。上層は10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルトで少量の炭・焼土を含むものであり、下層は2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂混シルトで炭・焼土を多く含む。床面中央部の炉の覆土は10YR3/3（暗褐）細砂混シルトで炭・焼土を多量に含むものである。床面中央部の炉南東に接した位置に砂岩製の台石が床面から遊離した状態で出土した。また、台石の周囲には焼土の集中した状況を検出した。床面から確実に掘り込む柱穴は５本検出したが、いずれも深さ10cm程度と浅いものであった。壁際に壁溝を巡らすもので、幅約20cm、床面からの深さ５～10cm、遺構検出面からの深さ15～20cmを測るものである。

［SD－６］　SD－６は調査区ほぼ中央からやや西寄りで検出した溝である（図版５）。この溝は最大幅2.4m、検出面からの深さ60cmを測る。この溝の主軸はN-42°－Eであり、その流路方向は底面の高さより北東から南西とみられる。覆土は灰黄色系のシルト質で大きく３層に分けられ、下層ほど砂質が強くなる。この溝の時期は出土遺物から畿内第Ⅳ様式の中葉頃とみられる。

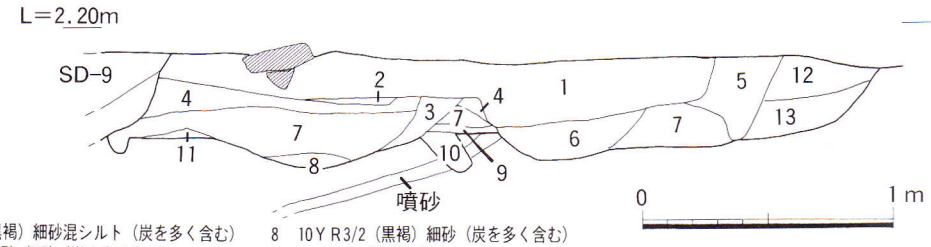


第７図　SB－３・４　遺構平面図及び土層断面図



第８図　SB－１　遺構平面図及び土層断面図

［SK－１］　SK－１は調査区東端の南側において検出した遺構である（第９図、図版８）。東西2.7m以上、南北2.5m以上の規模をもつものである。覆土は13層に分層できたが、第２層以下は複雑に入り組んでいる。土層断面観察において右上方へと伸びる噴砂がみられることから、この土層の堆積状況は地震の影響を受けたものとみられる。この覆土の状況と遺構の検出状況を考えると、SK－１は地震によって倒壊した竪穴住居の可能性があるといえる。また、覆土内からは弥生土器と共にサヌカイト剥片が多く出土している。



1　10YR3/1（黒褐）細砂混シルト（炭を多く含む）
2　2.5Y3/1（黒褐）細砂（炭を多く含む）
3　10YR3/3（暗褐）細砂（炭を多く含む）
4　10YR4/1（褐灰）シルト混細砂
5　10YR5/2（灰黄褐）シルト
6　10YR4/1（褐灰）粗砂（炭を多く含む）
7　10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂
8　10YR3/2（黒褐）細砂（炭を多く含む）
9　2.5Y4/1（黄灰）粗砂
10　10YR4/1（褐灰）粗砂混シルト
11　10YR4/2（灰黄褐）細砂
12　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂混シルト（炭を含む）
13　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂

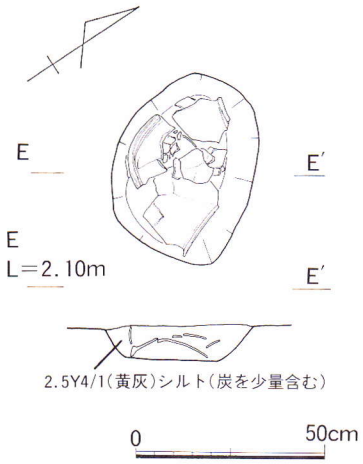
第９図　SK－１　土層断面図（調査区東壁）

［SK－２］　SK－２は調査区東端の南壁際において検出した土坑である（第６図）。この土坑は東西4.1m、南北1.1m以上を測る規模の大きなもので、一定量の弥生土器を含む。検出した状況から、竪穴住居が崩壊した可能性のあるものと考えられる遺構である。

［SK－23］　SK－23はSB－２と重なりをもち、北側の大半をSD－９によって削平された土坑である（第６図）。この土坑は東西3.7m、南北1.8m以上の方形プランをもつもので、遺構底面の南東隅には東西1.0m、南北0.9mを測る不定形の土坑がある。これらの状況から、竪穴住居の可能性が残る遺構である。

［SX－１］

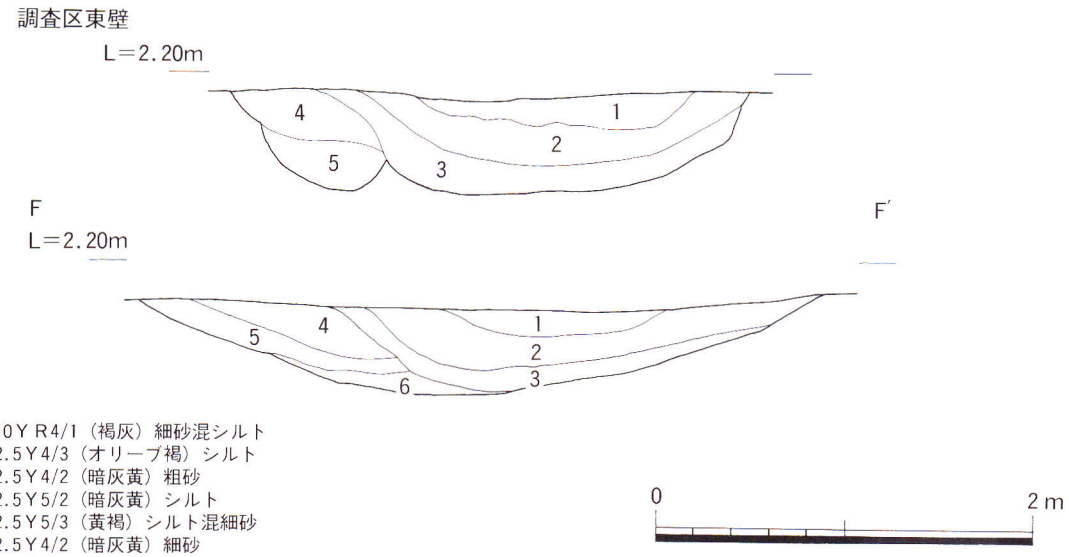
SX－１は調査区中央やや東寄りのSB－２とSB－３との中間部分で検出した土器棺墓とみられる（第10図、図版７）。この遺構は長径50cm、短径38cm、検出面からの深さ10cmの楕円形を呈した土坑であり、内部には畿内第Ⅳ様式古段階併行期の甕（第16図41、図版12）が押しつぶされた状況で出土している。



第10図　SX－１　遺構平面図及び土層断面図

（２）古墳時代の遺構

［SD－９］　SD－９は調査区東端ほぼ中央部から大きく弧をえがき調査区にそって走る溝であり、最大幅3.8m、検出面からの深さ60cm前後を測る（第11図、図版６）。この遺構の流路方向は底面の高さより東から西とみられる。覆土は灰黄色系のシルト質で３層に分けられ、下層ほど砂質が強くなる。最上層は下層とは異なり、褐灰色系の細砂混シルトで上層の第７層に酷似するものであり、この第７層堆積時に最終埋没したものと考えられる。また、この溝の土層観察から再掘削の痕跡が検出できた。覆土中には多くの土師器や須恵器が含まれており、最下層から出土した須恵器よりTK10型式併行期の時期が考えられる。



1　10Y R4/1（褐灰）細砂混シルト
2　2.5Y4/3（オリーブ褐）シルト
3　2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂
4　2.5Y5/2（暗灰黄）シルト
5　2.5Y5/3（黄褐）シルト混細砂
6　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂

第11図　SD－９　土層断面図

6．遺物

今回の調査で出土した遺物は、まず弥生時代では竪穴住居や溝、土坑など遺構の覆土から良好な出土をみた。また第８層の遺物包含層から少量の遺物を検出した。古墳時代の遺物は前期から後期にかけてのものがSD-９から一定量出土している。

まず弥生時代の遺物は、前期から中期後葉にかけての壺や甕、鉢があり、特に中期中葉から後葉にかけての土器が多量に出土している。石器は打製石器であるサヌカイト製の石鏃・石槍状石器・石錐・スクレイパーや磨製石器の石庖丁・太型蛤刃石斧・石杵、その他に叩石・凹石・砥石などがある。

次に古墳時代の遺物は、土師器の壺・甕・高杯や須恵器の蓋杯・有蓋高杯蓋などがある。また石製品では碧玉製管玉が２点出土している。

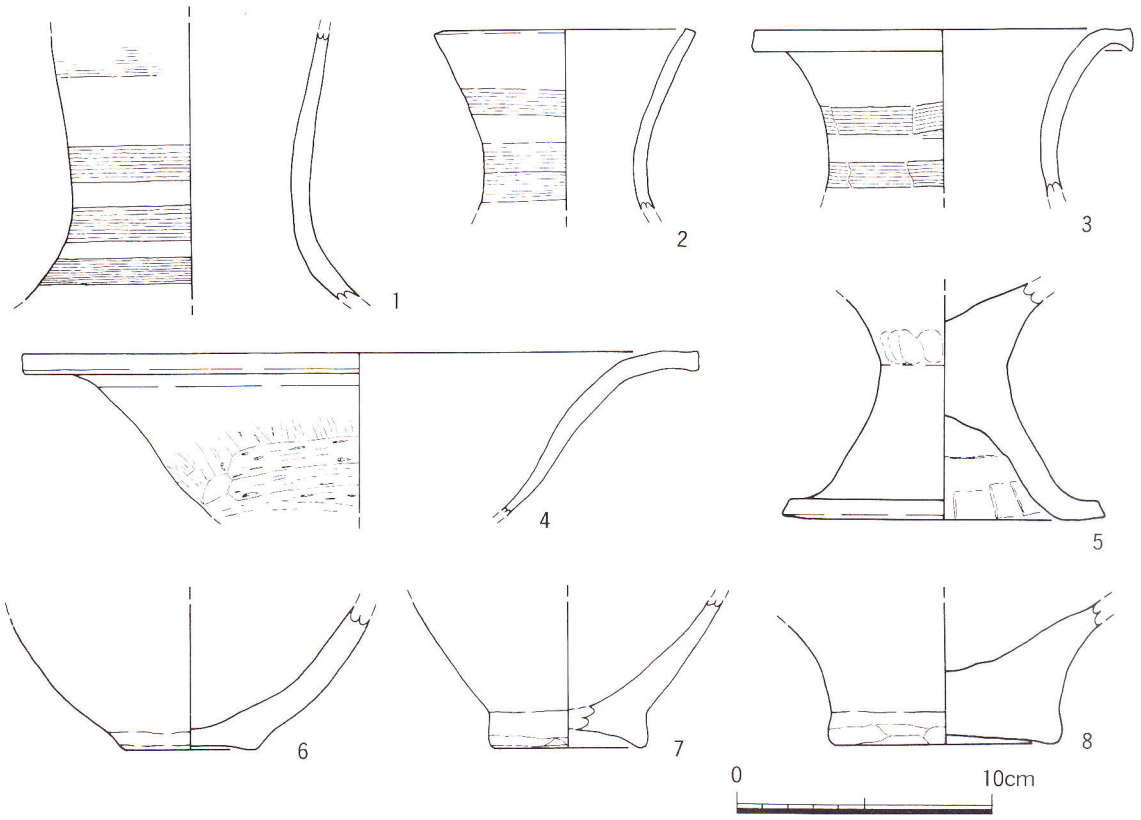
古墳時代以降の遺物では、削り出しの高台をもつ中国製の白磁碗１点の他、黒色土器、瓦器、肥前系陶磁器などが少量出土している。

また、自然遺物では馬の歯やサンゴなどが出土している。

本書では、これらの遺物を大きく各時代に分類してふれ、そのなかで遺構一括出土資料として弥生時代ではSB-２～４、SD-６・８、SK-10、古墳時代ではSD-９をまとめた。また石器・石製品は最後に記述する。

（１）弥生時代の遺物

［SB-２出土遺物］（第12図１～８、図版９）　まず壺は直口壺（１・２）と広口壺と（３）があ



第12図　遺物実測図１

る。これらはともに頸部周辺に多条の櫛描直線文を施している。

4は口径26.4cmを測る鉢と考えられるもので、体部下半にはいわゆる紀伊型甕と同様のヘラケズリ調整を行い、口縁部周辺を強いヨコナデによって仕上げている。この土器は、完形品の類例報告がなく、これまで蓋の可能性もあると指摘されているタイプである。5は鉢の脚部とみられる。脚部径12.6cmを測り、接地部を大きく屈曲させている。また脚部内面にはヨコ方向のヘラケズリ調整がみられる。

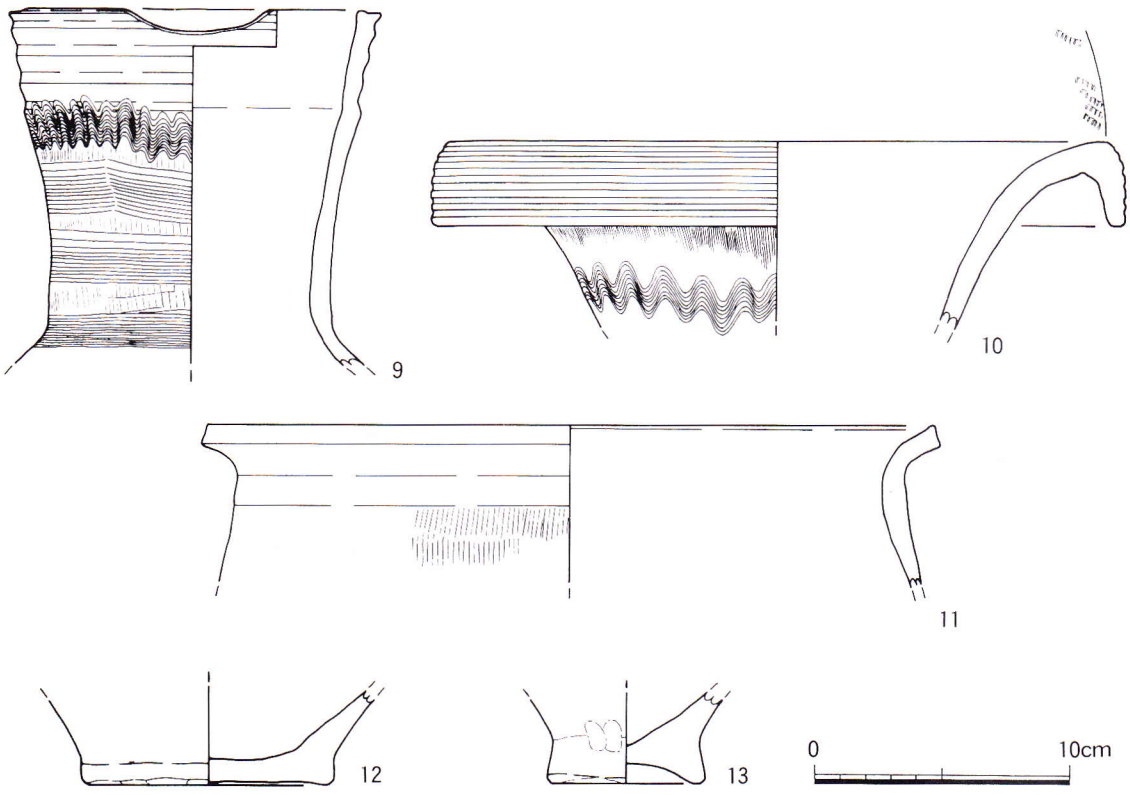
6～8は底部である。6は壺の底部とみられ、やや丸みをもちながら立ち上がる。7・8は甕の底部である。7は上げ底状のもので紀伊型甕の底部とみられる。8は肉厚な底部で大型の器形を呈するものとみられる。

これらの胎土は比較的粗く、石英・結晶片岩・赤色軟質粒などを含むことからすべて在地系の土器とみられ、時期的には畿内第Ⅲ様式の新段階に併行するものと考えられる。

［SB-4出土遺物］（第13図9～13、図版9）　9は直口壺の口縁部である。口縁端部には片口状の凹みが設けられている。この土器の外面はタテハケ調整を施したのち口縁下部に4条の凹線文を入れ、その下部を櫛描による波状文と直線文により加飾している。10は広口壺の口縁部であり、大きく垂下する口縁外端面には幅狭の凹線文が多条に施され、上端面には櫛描列点文がみられる。また頸部上位には、細かいタテハケ調整ののち波状文が施されている。

11は口径28.4cmを測る畿内通有タイプの甕であり、口縁部はヨコナデにより緩やかに屈曲する。この甕の外面調整は比較的粗いタテハケ調整が観察できる。

12・13は底部である。13は底径5.8cmを測る上げ底状のもので紀伊型甕の底部とみられる。



第13図　遺物実測図2

これらの胎土は比較的緻密なもの（9・11）と粗雑なもの（10・12・13）があり、胎土中には石英・結晶片岩・赤色軟質粒などを含む。これら遺物から畿内第Ⅲ様式併行期と第Ⅳ様式併行期の端境期頃のものと考えられる。

［SB-3出土遺物］（第14図14～25、図版10）　14は細頸壺である。緩やかに窄まる頸部には2条の凹線文が施されている。また凹線文の下部には把手を貼り付けていたと考えられる径3.5cm程度の穿孔がみられる。15は広口壺の口縁部で大きく垂下する外端面には5条の凹線文を施したのち多条のタテ方向の櫛目が4ヶ所入れられている。また幅狭の頸部には2条の貼り付けによる断面三角突帯が、その上方には波状文が2条、下方には波状文の痕跡がみられ、さらに口縁上端面に櫛描列点文があり、これらにより丁寧に加飾されている。内面はナナメ方向の粗いハケ調整を施したのち指ナデによってこれを消している状況が顕著に観察できる。16は比較的下方に最大径をもつ広口太頸壺の体部である。この壺の外面は上半部にはタテハケ調整を行い、また底部周辺の下半部にはヨコ方向のヘラミガキ調整を行っている。この後10本を1単位とする7条の櫛描直線文と波状文、櫛描列点文により加飾している。17は細頸壺肩部の破片であり、ヨコ方向の把手が付くものである。

甕の口縁部（18）はSB-3の古段階の遺物である。この甕はいわゆる紀伊型甕の口縁部であり、口縁端部をヨコナデにより大きく外反させている。19は球体の器形をもつ甕であり、口縁部を大きく外側に折り曲げ、上方に肥厚させている。この甕の外面頸部下にはヨコ方向の細かいハケ調整が、また体部下方にはナナメ方向のヘラケズリ調整が用いられており、この体部下半に黒斑が観察できる。20は同じく大きく屈曲する口縁部をもつもので端部を軽く上下に肥厚させている。口縁部外端面下方には刻み目が、また頸部下には櫛描による綾杉文が施されている。21はさらに口縁端部の上方への突出が進んだ甕であり、体部上方には成形時のタタキが明瞭に残り、体部下方はこれをヘラケズリ調整によって消している。

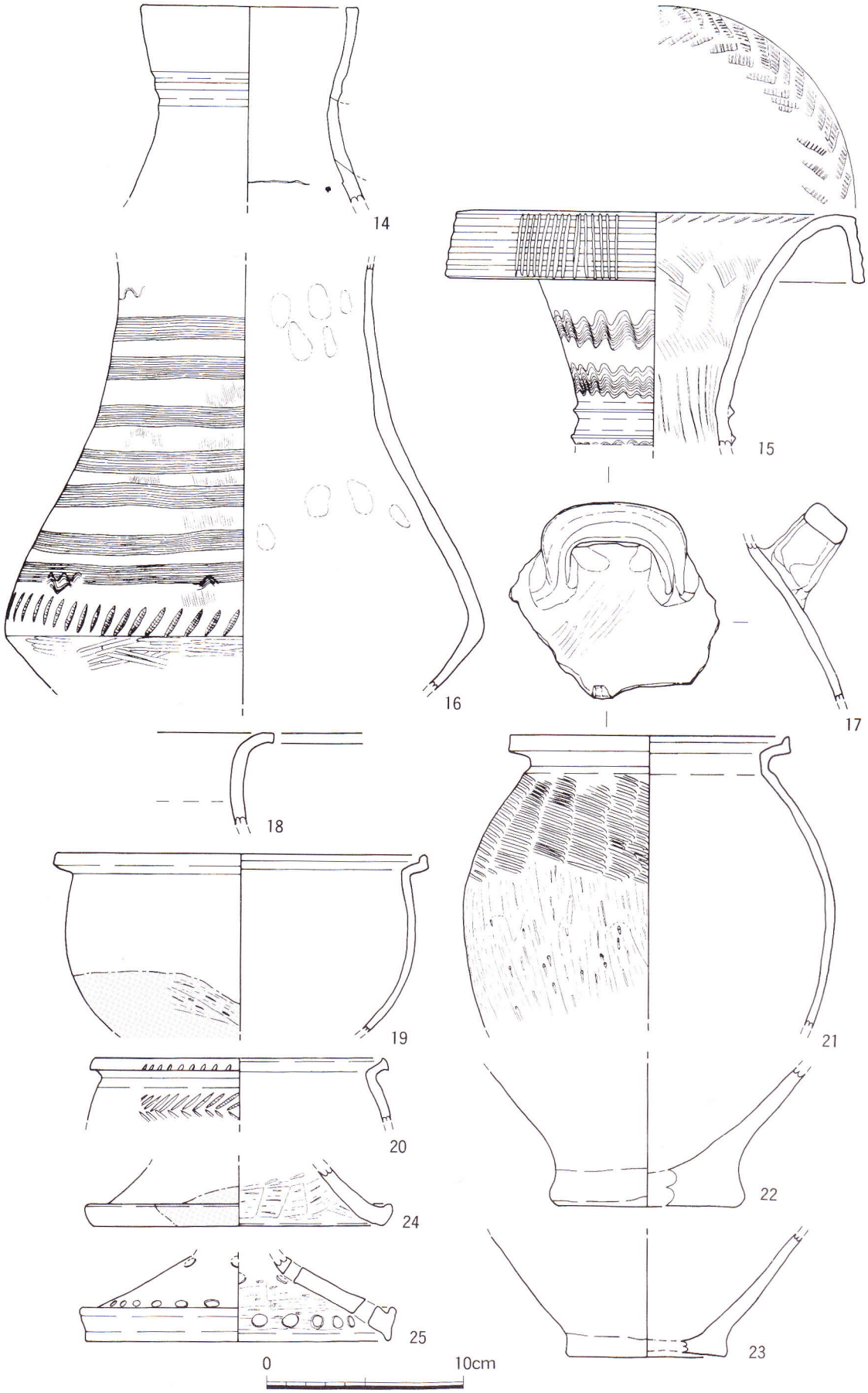
22・23は底部である。22は底径9.0cmを測る平底状のもので、肉厚なものである。また23は器壁が比較的薄くやや上げ底状のもので、外面にはタテ方向のヘラケズリ調整が施されている。

24・25は脚部である。24は端部を丸くおさめ、やや上方に肥厚させるものである。25は端部を上下に肥厚させるタイプのもので、上下2段に径6㎜程度の円孔を穿つものである。これらの内面はともにヨコ方向のヘラケズリ調整を用いている。

これらの胎土中には石英・結晶片岩・長石・赤色軟質粒などを含むものが大半をしめるが、15には長石と黒雲母が一定量含まれており、また色調も他のものに比べやや白っぽい淡褐色であることなどから搬入品である可能性が高い。また時期的には、SB-3の古段階は希薄ながらおそらく畿内第Ⅲ様式併行期におさまるものとみられ、また新段階はやや古い時期のものも含まれるが、畿内第Ⅳ様式併行期の中葉頃のものと考えられる。

［SD-8出土遺物］（第15図26～29、図版11）　26は口径17.6cmを測る直口壺の口縁部である。口縁下部の外面には2条の断面三角突帯が貼り付けられ、その上方と下方に波状文が、さらにその下方を櫛描直線文により加飾されている。27は口径14.4cmを測る広口短頸壺である。ほぼ直角に折れ曲がる口縁部は上下に肥厚させ、外端面には1条のヘラ描き沈線文が施されている。

28は無頸壺の脚部とみられる。ほぼ垂直に立ち上がる部分に直径3.2cmを測る円孔を穿ち、その下部に2条の凹線文が施されている。

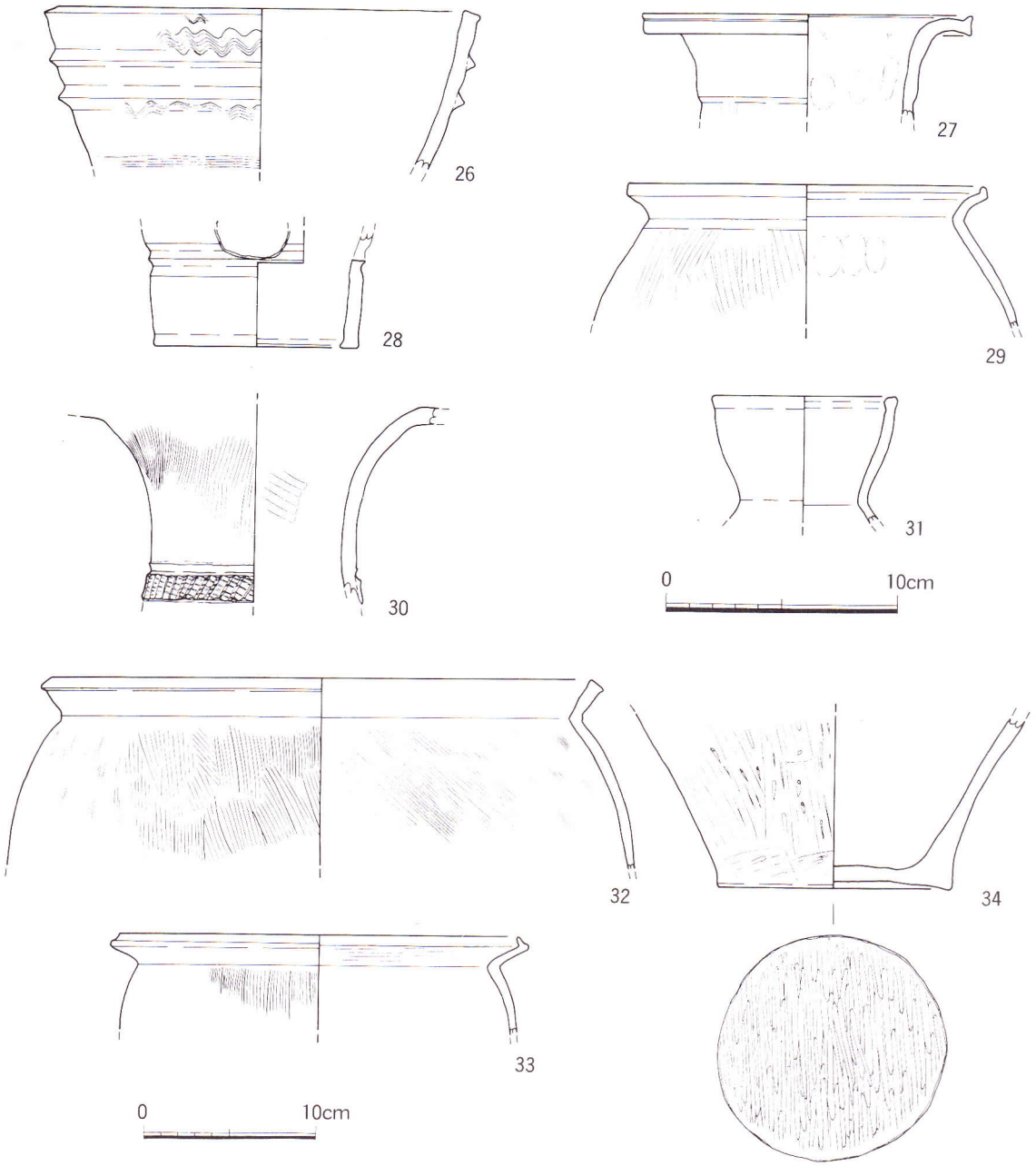


第14図　遺物実測図 3

29は口径15.5cmを測る甕である。この甕は「く」の字状に折れ曲がる口縁端部を上方に肥厚させているものである。外面には比較的粗いタテハケ調整がみられる。

これらの胎土中には石英・結晶片岩・長石・赤色軟質粒などを含むものが大半を占めるが、28には結晶片岩と黒雲母がともに含まれている。これら遺物から、26は畿内第Ⅲ様式の中葉頃に比定できるものであるが、それ以外のものは畿内第Ⅳ様式併行期のものと考えられる。

［SD-6出土遺物］（第15図30～32、図版11）　30は広口壺の頸部上位の破片である。頸部には粘土紐を折り曲げて貼り付けている。この壺の外面調整はタテ方向のハケ調整が、また内面にはナナメ方向のハケ調整の後、指ナデによってこれを消している。31は口径17.6cmを測る細頸壺である。内外面ともヨコナデによって仕上げている。



第15図　遺物実測図4

32は口径31.4cmを測る大型の甕である。この甕の口縁部は大きく「く」の字状に折れ曲がり、やや端部を肥厚させるもので、内外面とも粗いハケ調整が施されている。

これら遺物は胎土中に含まれる鉱物から在地系のものとみられ、時期的には、32はやや古い様相をもつが、それ以外のものは畿内第Ⅳ様式併行期のものと考えられる。

［SK-10出土遺物］（第15図33・34、図版11）　33は口径23.0cmを測る甕である。この甕は「く」の字状に折り曲げた口縁端部を上方に突出させている。外面には比較的粗いタテハケ調整が、また口縁内端面にはヨコハケ調整が施されている。

34は底径13.3cmを測る底部である。この底部の外面調整はいわゆる紀伊型甕特有の粗いタテ方向のヘラケズリ調整であり、また底面は丁寧なヘラミガキ調整を行っている。この状況からおそらく大型の紀伊型甕とみられるが、底面の調整が特殊なものである。

［その他の出土遺物］（第16図35～46、図版11・12）　35・36は直口壺の口縁部である。35は口縁部がやや外反気味にのびるもので、外面に多条の櫛描直線文を巡らすものである。36は35と同様の外反気味の口縁部に5条の凹線文を施している。37・38は広口壺である。37はやや垂下気味に折れ曲がる口縁端部を上下に肥厚させている。頸部には3条の凹線文を施し、その上下を櫛描による波状文と直線文によって加飾し、さらに口縁外端面には波状文を上端面には櫛描列点文を施している。38は大きく外反する口縁部を斜め下方に垂下させ、その外端面に円形浮文を貼り付けている。これらの出土位置は35・36がピット、37がSK-6、38がSK-11である。

39～41は甕である。39は緩やかに外反しながらのびる口縁部をもつ紀伊型甕である。体部下半はヨコ方向のヘラケズリ調整を施し、上半部はヨコナデによってこれを丁寧に消している。40は口縁部が鋭角に折れ曲がるものであり、外面には粗いタテハケ調整が顕著に観察できる。また41は口径17.1cm、復元高26.0cmを測るものであり、外面は剥離のため不明瞭であるが、内面と同様のタテハケ調整とみられる。これらの出土位置は、39が第8層、40がSK-1、41がSX-1である。

42～44は底部である。42・43は外面にタテ方向のヘラケズリ調整を施したもので、紀伊型甕の底部とみられる。44は外面にタテ方向のハケ調整が、また内面にはヘラケズリ調整が用いられている。これらの出土位置は、42がSK-2、43がSK-12、44がSK-11である。

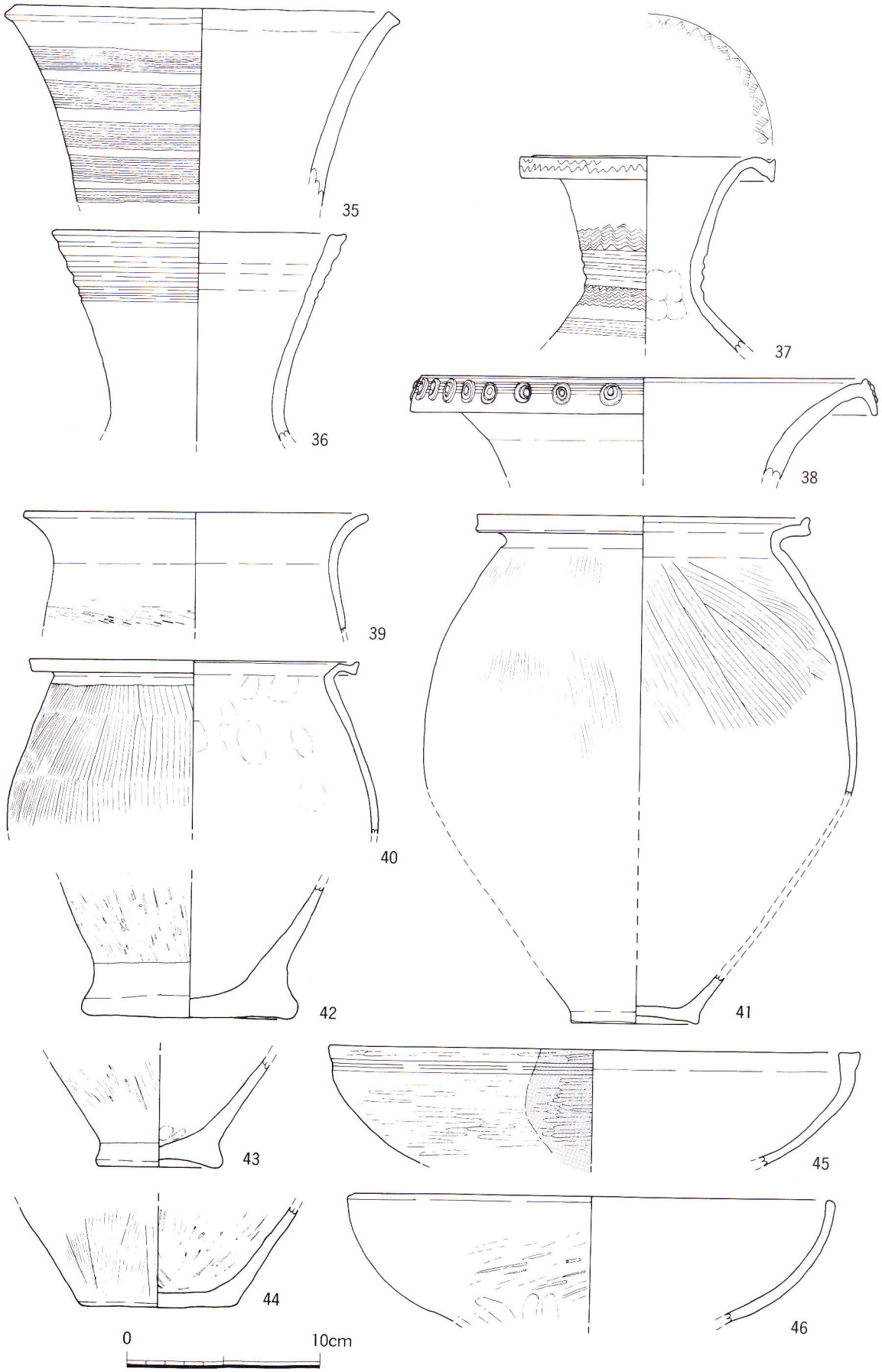
45・46は鉢である。45は口径27.2cmを測るもので、口縁部下に凹線文を1条施しているもので、外面にはヨコ方向の丁寧なヘラミガキ調整がみられる。46は口径24.4cmを測る丸みを帯びた器形のもので、外面にはナナメ方向のヘラケズリ調整が用いられている。これらの出土位置は、45がSK-6、46がSK-11である。

（2）古墳時代の遺物

［SD-9出土遺物］（第17図47～60、図版12）

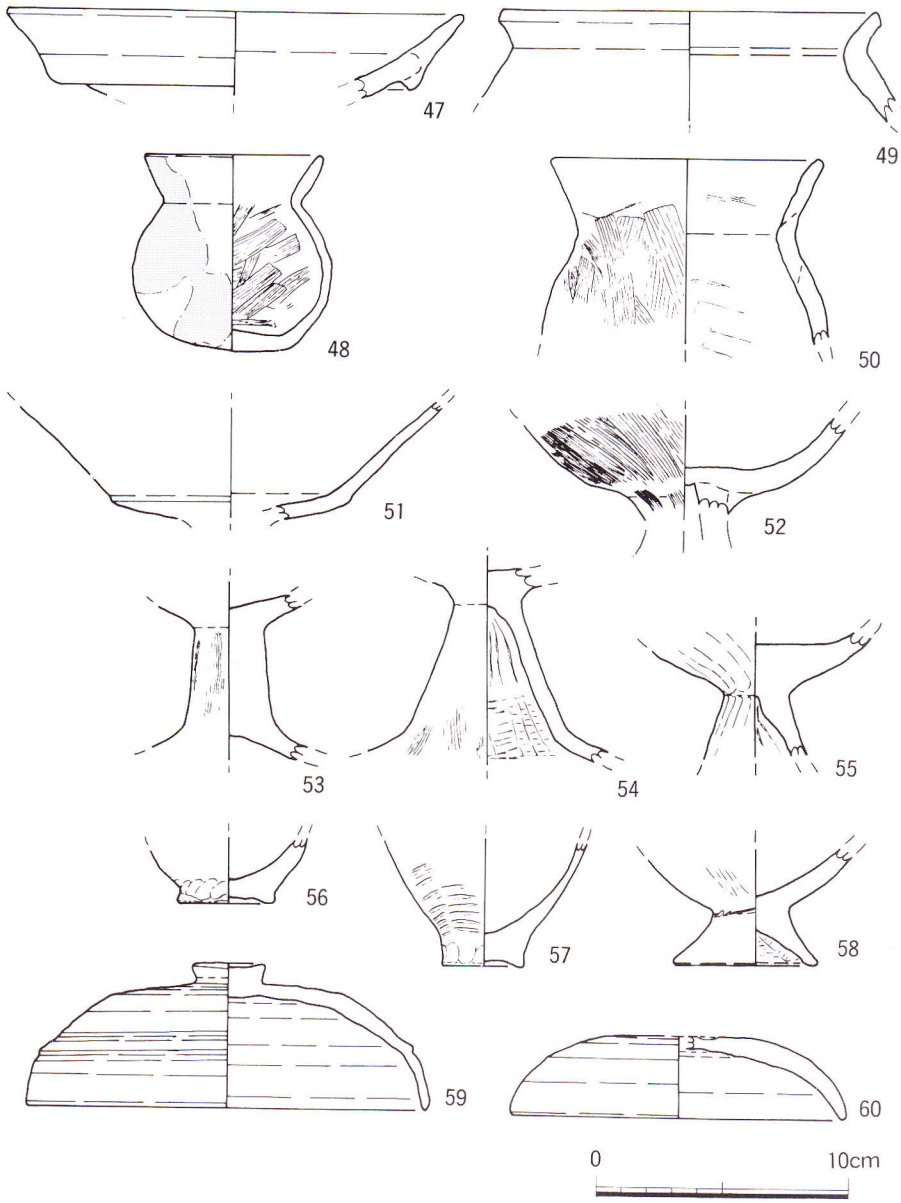
出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器がみられる。また、生駒西麓産の庄内併行期の甕が出土している。

47～58は、土師器である。47・48は壺である。47は二重口縁壺の口縁部である。復元口径18.0cmを測る。48は小型丸底壺である。口径18.0cm、器高7.8cmを測る。口縁部から底部にかけての外面には黒斑がみられる。内面は不定方向のハケ調整が施されている。49・50は甕である。49は口縁部



第16図　遺物実測図 5

である。復元口径14.8cmを測る。50は外面にタテハケ、内面に板状工具痕がみられる。また輪積成形時の接合痕も観察された。復元口径10.6cmを測る。51～55・58は高杯である。51は杯部で剝離しているが内外面にミガキの痕跡が観察できる。古墳時代初頭のものとおもわれる。52は杯部で外面にハケ調整がみられる。53は脚部外面にヘラミガキ調整がみられる。54は外面にタテハケ、内面は板状工具によるナデと絞り目の痕跡がみられる。55の外面にはヘラミガキが施されている。58は杯部外面にミガキ、脚部内面にクモの巣状ハケメが施されている。56は小型壺の底部とおもわれる。外面にユビオサエがみられる。57は甕の底部である。外面にユビオサエ、体部にタタキ調整が明瞭にみられる。59・60は、古墳時代後期の須恵器の蓋である。59は有蓋高杯の蓋である。天井部に擬宝珠様のつまみが付くもので天井部の約2/3を回転ヘラケズリ調整を施している。口径は15.7cm、器高5.75cmを測る。ロクロ方向は左回転である。TK10形式に比定でき、6世紀後半の所産のものとみられる。60は杯蓋で、約1/2を回転ヘラケズリ調整を施している。ロクロ方向は右回転である。



第17図　遺物実測図6

口径は13.2cm、器高3.3cmを測る。TK43形式に比定でき、６世紀後半の所産のものとみられる。

（３）石器（第18・19図・図版13・14）

61～71はサヌカイト製の打製石鏃である。61は平基式の石鏃で長さ2.9cm、幅1.4cm、厚さ５㎜を測り、重量は2.0ｇである。表裏両面に大剝離面を残しており、板状の素材剝片の周縁を基部から先端部に向けて細部調整している。62は凸基Ⅰ式の石鏃で、長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ４㎜を測り、重量は1.3ｇである。63～66は凸基Ⅱ式に分類される一群である。65は全体的に風化が著しく淡灰色を呈している。66は長さ4.8cmを測る大型品である。重量はそれぞれ1.2ｇ、1.0ｇ、1.5ｇ、4.9ｇを量る。67～71は有茎式の石鏃で、色調は全て黒灰色を呈する。67は基部の形態から石錐の可能性が残るものである。68は長さ4.3cm、幅1.6cm、厚さ８㎜、69は長さ3.3cm、幅1.2cm、厚さ６㎜を測り、重量はそれぞれ4.6ｇ、1.9ｇである。70・71は最大幅が2.0cmを越える一群で、平面形が菱形を呈するものである。残存重量はそれぞれ2.7ｇ、3.1ｇを量る。なお、遺物の出土位置としては、61・67は上部包含層、62・63・66は第７層、64はSK－４、65は第５層、68はSB－３、69・71はSD－９、70はSB－１から出土したものである。

72はSB-3出土のサヌカイト製の石槍状石器で、黒灰色を呈するものである。残存長4.6cm、最大幅2.4cm、厚さ７㎜を測る。基部から先端部に向けてウロコ状の調整が施される。

73はSD－８、74はSK－１出土のサヌカイト製の打製石錐である。73は長さ2.7cm、幅0.9cm、厚さ４㎜を測る。両面に大剝離面を残す板状剝片の周囲に、細部調整を施して仕上げている。74は長さ4.1cm、幅1.3cm、厚さ1.1cmを測る。錐部から頭部に向けて調整が行われており、やや粗い調整の頭部に対して、錐部は丁寧な細部調整を施している。共に頭部と錐部の境がないタイプである。重量はそれぞれ1.4ｇ、5.2ｇを量る。

75はSB－１出土のサヌカイト製のスクレイパーである。幅6.5cm、長さ5.0cm、厚さ1.5cmを測り、重量は49.4ｇである。色調は淡灰色であり、形態から打製石庖丁の可能性が考えられる。

76～78は結晶片岩製の磨製石庖丁である。76は直線刃で半月形を呈する片刃の石庖丁である。長さ12.8cm、幅4.1cm、厚さ7.5cmで重量は61.9ｇである。77はやや刃部が彎曲するタイプで、刃部が片刃のものである。長さ11.7cm、幅4.2cm、厚さ7.5cmで重量は53.6ｇである。

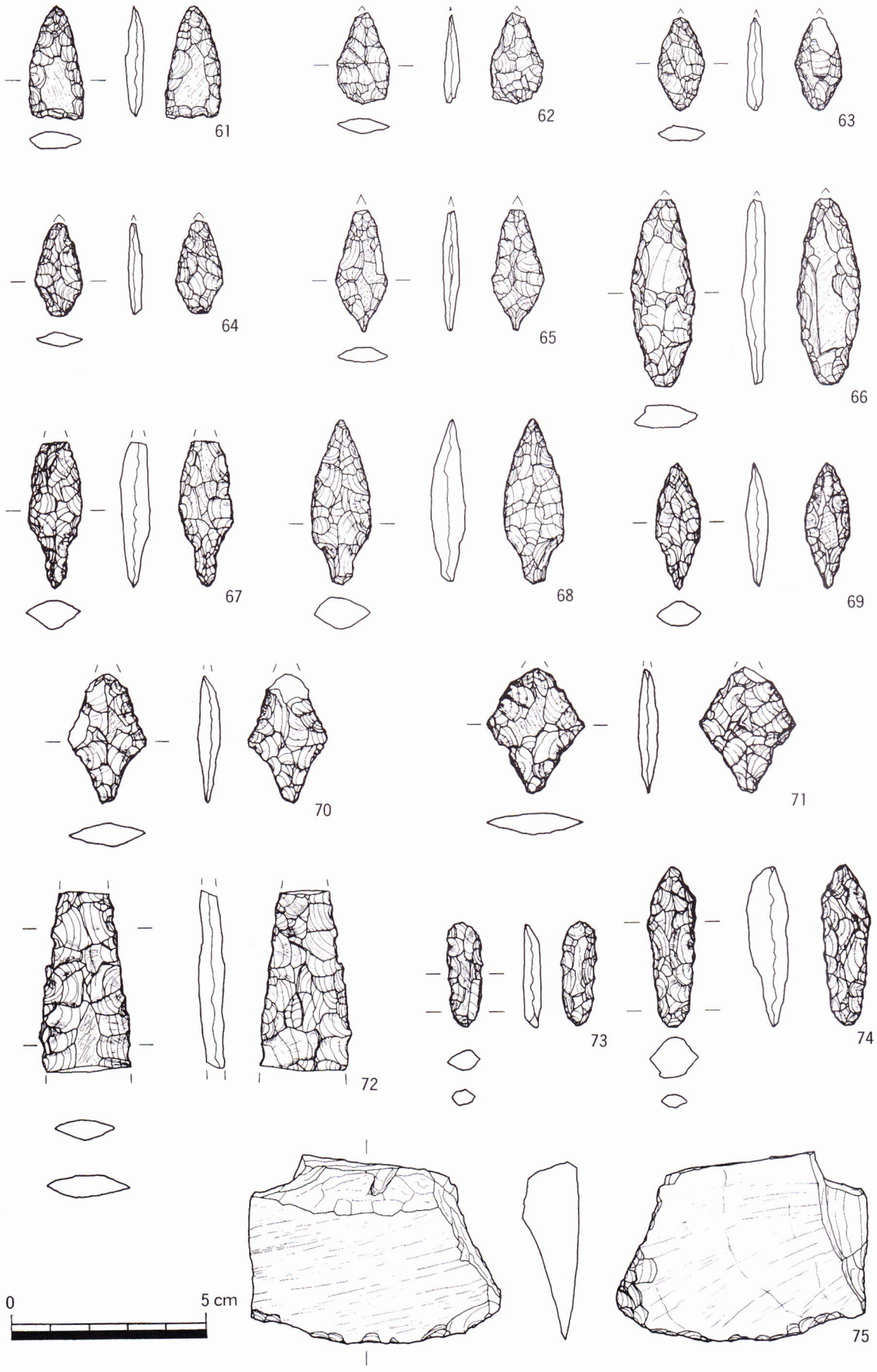
79はSK－１出土の結晶片岩製の太形蛤刃石斧である。刃部側が広くなる長台形状であり、断面形は楕円形を呈する。法量は長さ13.4cm、幅5.1cm、重量380ｇであり、色調は暗緑色を呈する。

80はSD－６出土の石杵である。砂岩製で暗青灰色を呈しており、法量は長さ6.5cm、幅5.8cm、重量300ｇである。作業面は非常に平滑であり、広範囲に朱が付着していることから、辰砂精製の過程において用いられた道具であると考えられる。

81・82は砂岩、83は花崗岩を用いた叩石で、側縁部を中心に敲打痕を観察することができる。83は全体に火を受けており、灰白色に変色している。重量はそれぞれ170ｇ、290ｇ、350ｇを量る。

84はSK－４出土の凹石である。石材は砂岩で、敲打のために両面とも中央部がやや凹んでいる状況が観察できる。残存重量は1.5kgである。

85はSB－３出土の砥石である。石材は砂岩であるが、火を受けているため乳白色に変色している。ほぼ全面を砥石として使用しており、各面が研磨により彎曲している。また、直線状のミガキ痕が６～７条観察できる。長さ11.7cm、幅9.9cmを測り、重量は490ｇである。



第18図　遺物実測図 7

85　SB-3出土
76・81・83　SB-4出土
79　SK-1出土
84　SK-4出土
77・80　SD-6出土
78　SD-9出土
82・86　包含層出土

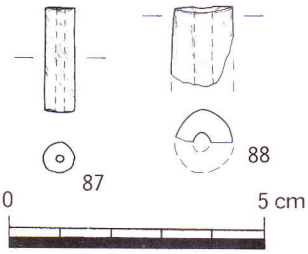
第19図　遺物実測図 8

86は用途不明の棒状の石製品である。結晶片岩製で敲打によって形を整えている。横方向に敲打によるえぐりが一周巡っており、石棒の可能性が考えられる。

（4）石製品（第20図・図版14）

87・88は碧玉製の管玉である。87は完形品であり、長さ2.1cm、直径6㎜、穿孔径2㎜、重量1.3cmを測る。

88は残存長1.6cmで、復元すると直径1.2cm、穿孔径4㎜となる。出土位置は87が第7層最上部、88がSK−1の最上層であるが、検出した層位的な状況から、共に古墳時代のものである可能性が高い。



第20図　遺物実測図9

7．まとめ

（1）出土石器の検討

今回の調査において、弥生時代を中心に多くの遺物が出土しているが、ここではその中でも石器を取り上げ、これらの出土状況などから若干の考察を加えてみたい。

○石器組成について

出土した石器について、器種毎の点数を遺構・出土層位別に集計し、組成表を作成した（第1表）。扱った資料は合計153点である。組成表には横軸に分類・器種名を、縦軸には遺構・出土層位を配しそれぞれの合計を示している。分類は大きく打製石器・磨製石器・礫石器に大別し、それぞれ用途別に細分を行っている。なお、ここでいう礫石器は、使用痕から石器と認定される一群のことで、

第1表　石器組成表

分類 / 遺構名	打製石器										磨製石器				礫石器					合計	遺構の時期
	狩猟具・武器							加工具			収穫具		伐採・加工具		加工具						
	石鏃					石槍状石器	尖頭器	石錐	楔形石器	スクレイパー	石庖丁	石庖丁未製品	太型蛤刃石斧	柱状片刃石斧	石杵	叩石	磨石	砥石	凹石		
	平基	凸基I	凸基II	有茎	不明																
SB−1				1						1				1		2	1	1	1	8	第Ⅳ様式
SB−2												1				4		2	1	8	第Ⅲ様式
SB−3				2	2	1										3	2	5		15	第Ⅳ様式
SB−4											1	1				6		1		9	第Ⅳ様式
SK−1								1					1			1		1	1	5	第Ⅳ様式
SK−2			1							1		1				2	2		1	8	第Ⅳ様式
SK−6																		1		1	第Ⅳ様式
SK−10																1				1	第Ⅳ様式
SK−11																		1		1	第Ⅳ様式
SK−17																1				1	弥生時代
SD−6							1		2		1	1			1	1				7	第Ⅳ様式
SD−7								1												1	第Ⅳ様式
SD−8			2	2										1						5	第Ⅳ様式
SD−9			1	4					1	1		2				15	4	6	2	36	古墳後期
P−33																			1	1	第Ⅳ様式
第7層		1	2		1			1			1	2				6	14	3		31	
その他	1		2	1							1	2				6		2		15	
合　計	1	1	8	10	3	1	1	3	3	3	4	10	1	2	1	48	23	23	7	153	

叩石・磨石・砥石・凹石等がこれに相当するものである。また、叩石・磨石は複合的に用いられるものが多いが、ここでは磨痕が顕著でも敲打痕が認められる資料は叩石として、磨滅痕のみ認められる資料を磨石として扱った。

全体的な石器組成としては、狩猟具・武器である石鏃・石槍状石器・尖頭器が16%、収穫具である石庖丁及びその未製品が９%、伐採・加工具である太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧が２%、打製加工具である石錐・楔形石器・スクレイパーが６%、礫石器の加工具である石杵・叩石・磨石・砥石・凹石が67%を占める。なお使用石材の割合であるが、打製石器についてはサヌカイト、磨製石器については結晶片岩をほぼ100%の割合で使用している。礫石器の石材は砂岩がほとんどを占めるが、叩石・砥石の中には花崗岩を用いているものも若干認められる。

石鏃は合計23点出土しているが、そのうち凸基Ⅱ式が８点、有茎式が10点を占める。しかし、その多くが溝や包含層出土であるため、その扱いには注意する必要があろう。また、石庖丁は未製品が10点出土しており、石庖丁の生産を考える上で興味深い。

これらの石器を遺構別にみてみると、竪穴住居（SB-１・３・４）及びその可能性を残す遺構（SB-２、SK-１・２）からのものが多い。SD-６・９の遺物は周辺の遺構から流れ込んだものと思われる。

以上をまとめると、狩猟具・武器に対して収穫・伐採・加工具が卓越しており、中でも礫石器の加工具が67%を、収穫具が約10%を占める状況が指摘できる。なお、遺構の時期としては、弥生時代第Ⅳ様式の土器を含むものが多く、これらの石器組成の状況は弥生時代中期後葉を中心とした時期のものと考えられる。

○サヌカイト剥片について

出土したサヌカイトの剥片について、自然面を残すものと残さないものに大別し、剥片の大きさによってそれぞれ３種類に分類した（第２表）。

自然面を残すものは合計47点で５cmを超えるものが７点出土している。自然面を残さないものの剥片出土数は合計137点で全体の約75%を占める。石器製作の拠点集落遺跡を発掘すると、自然面を残す剥片等が多量に出土するが、今回出土した自然面を残す剥片は全体の25%であり、少なくとも調査地周辺からは石器製作の拠点集落を示唆する状況は窺えない。また、出土剥片のほとんどが石鏃・石錐などを製作できる程度の小型剥片類であり、石槍状石器の素材となるような10cmを超える大型剥片はみられない。

次に遺構別にみてみると、検出した

第２表　サヌカイト剥片集計表

分類 / 遺構名	自然面を残す			剥離面のみ			合計	重量(g)
	2cm未満	2～5cm	5cm以上	2cm未満	2～5cm	5cm以上		
SB-1		1		3			4	8.2
SB-2		1		1			2	1.7
SB-3		5		18	12		35	35.6
SB-4		1		2	2		5	7.2
SK-1		2	1	6	1		10	55.3
SK-2		1	1	1	1		4	27.3
SK-3		1					1	2.5
SK-24				2			2	0.2
SD-3				1	1		2	0.9
SD-6	1	3	1		4		9	45.2
SD-7				1			1	0.8
SD-8	3	2		4	3		12	8.1
SD-9	1	9	3	8	18	1	40	228.5
P-80				1			1	0.2
P-82		1			2		3	11.4
P-103				1			1	0.8
第７層	1	4	1	10	16		32	71.0
その他		3		6	10	1	20	75.1
合　計	6	34	7	65	70	2	184	580.0

住居の中でもSB-3とSK-1において剥片が集中する傾向を示している。このことは、当該遺構が石器の製作に係わる場であったことを想定させるものであり、また出土剥片の傾向からその製品は小型のものが中心であったと推測できる。

参考文献
『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1980年
『弥生文化の研究5　道具と技術Ⅰ』　雄山閣　1985年
『弥生文化の研究7　弥生集落』　雄山閣　1985年
土井孝之「和歌山県の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成4』　国立歴史民俗博物館　1997年

(2)太田・黒田遺跡検出の竪穴住居について

今回の第43次調査では弥生時代中期中葉から後葉にかけての竪穴住居を調査区ほぼ中央部で3棟（SB-1・3・4）が重なりをもって検出したほか、調査区東端周辺において竪穴住居の可能性を残すものを4基（SB-2、SK-1・2・23）検出した。これらを過去の調査で検出したものと比較し、その変遷を追ってみると次の通りとなる。

まず太田・黒田遺跡における既往の調査では、弥生時代の竪穴住居を約30棟（建て替えを含む）検出している。これらは、弥生時代前期末から中期後半のもので、すべて円形から楕円形をなし、住居ほぼ中央の床面に炉をもつものである。

まず第1次調査では、中期の円形竪穴住居が2棟検出され、内1棟は直径6.0mを測り、4本柱のものとされる。第2次調査では、中期の円形竪穴住居が1棟検出されている。第3次調査では、中期の円形竪穴住居が2棟検出され、内1棟は中期後葉の直径9.0m、11本柱のものであり、床面を造りかえている。また他の1棟は中期中葉のもので、直径6.6mを測り、4本柱のものとされる。第4次調査では中期の円形竪穴住居が4棟検出され、内1棟は中期後葉の建てかえが行われたもので、その古段階のものは6.4×6.1m、新段階のものは7.5×6.4mを測り、共に楕円形で4本柱の住居とされる。また第5次調査では中期の円形竪穴住居が4棟検出され、このなかには中期中葉から後葉にかけての8.0×7.5mを測るやや楕円形で4本柱のものや直径5.8mとやや小さな住居などが検出されている。これらの調査成果から竪穴住居については、直径8～9mの大型のものと、4～6mのやや小型のものがあり、大型のものは比較的同じ場所での建てかえや増築が、比較的小さなものは建てかえがみられないものが多いと指摘されている(註1)。

第15次調査では中期後半の直径3.6mの円形竪穴住居が1棟と、同遺跡では最も古い時期の前期後半の直径8.3mの円形竪穴住居が1棟検出されている。また第17次調査では中期の竪穴住居が2棟検出されている。第22次調査では中期の竪穴住居が3棟検出され、内1棟は直径約12mを測る中期中葉のものである。また他の1棟は直径約6mを測る中期中葉のものであり、建てかえがみられる住居である(註2)。

今回の調査において検出した竪穴住居では、最も古いもので畿内第Ⅲ様式の新段階に併行するSB-2であるが、この住居は東西幅4.8m、南北幅2.6m以上を測る不定形のもので正確な状況が得られていない。次に新しいSB-4は長径5.2m、短径4.5mのやや楕円形の住居で4～5本柱であったとみられる。さらに新しいSB-3は長径5.7m、短径4.5mの規模を測るやや楕円形の住居で建て

かえが行われた可能性を残す住居である。この住居の床面では、東西幅1.1m、南北幅1.4mを測る炉を検出した。また最も新しいSB-1は一辺4.8mの隅円方形の平面形をもつ住居である。この住居は、遺物の出土量が最も少なく、床面の状況から焼失家屋であるものと考えられる住居である。

これらの住居はSB-2を除いて畿内第Ⅳ様式の前葉から中葉頃に併行する時期のものと考えられることから、過去の調査のなかでも最も新しい一群としてとらえることができる資料といえる。これらの規模は、4～6mのやや小型のものであり、楕円形をなすものである。また地震の液状化により平面プランが不明確ながら隅円方形になる可能性のもの（SK-1）や隅円方形と考えられるもの（SB-1）を検出している。このことから、平面形が円形から隅円方形へ移行する傾向を示す貴重な資料といえる。

（註）

1　森浩一・大野左千夫　「17.和歌山市太田黒田遺跡」　『日本考古学年報』21・22・23（1968・1969・1970年度版）　日本考古学協会　1981年

2　「太田黒田遺跡発掘調査現地説明会資料」　和歌山市教育委員会・（財）和歌山市文化体育振興事業団　1988年

（3）古墳時代の大溝SD-9について

調査区の東端ほぼ中央部から大きく南へ弧をえがき調査区にそって走る溝・SD-9は最大幅3.8m、検出面からの深さ60cm前後を測る大溝であるといえる。この遺構の流路方向は底面の高さから、東から西方向とみられ、幅及び深さがほぼ一定であり、底面の比高が比較的緩やかなことなど、灌漑用水路の可能性が高いものとみられる。

なお、太田・黒田遺跡で検出された弥生時代の溝の流路方向は過去の検出例から西から東あるいは東南方向へと向かっている場合が多い。それについては、弥生時代の太田・黒田遺跡範囲の西方向に水の引先となる自然河道が存在したものとみられ、この河道は日下雅義により復原案を提示されている当時の旧紀ノ川の流路に相当するものであると考えられ、そこから引水していたものと考えられる。

ここで今回検出した古墳時代の大溝・SD-9について弥生時代の溝の一般的な方向性と異なる理由を考えるならば、鳴神Ⅳ遺跡で検出された古墳時代前期の大規模な水路の開削による灌漑用水路網整備の影響をうけた可能性を推定することができる。古墳時代の大溝・SD-9の正確な開削時期は不明であるが、土層堆積状況の観察から数度の再掘削がなされたものと思われ、出土した須恵器から古墳時代後期が最終埋没の時期と考えられる。

参考文献

日下雅義「紀伊湊と吹上浜」『和歌山の研究』1　地質・考古編　清文堂　1979年

『鳴神地区遺跡　発掘調査報告書』和歌山県教育委員会　1984年

『太田・黒田遺跡　第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995年

『太田・黒田遺跡　第33・34次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1996年

報告書抄録

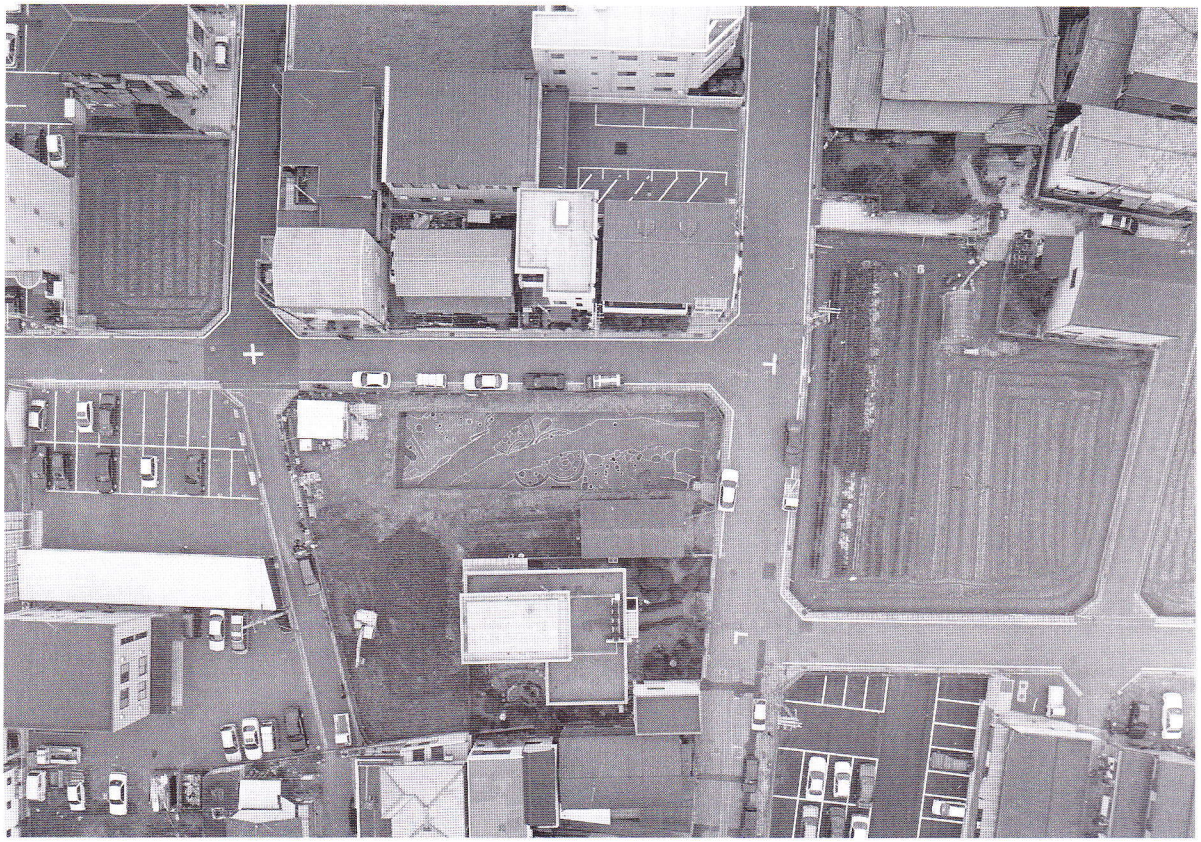
ふりがな	おおた・くろだいせきだい43じはっくつちょうさがいほう
書名	太田・黒田遺跡 第43次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書
シリーズ番号	第２０集
編著者名	北野隆亮・井馬好英・奥村薫・高橋方紀・前田敬彦
編集機関	財団法人 和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640-8227　和歌山県和歌山市西汀丁29　TEL0734－35－1195
発行年月日	西暦　1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
おおた・くろだ 太田・黒田 いせき 遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 くろだ 黒田	3020150	327	34° 13′ 53″	135° 11′ 51″	19980112 19980226	250	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田・黒田 遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	竪穴住居４ 土器棺1、大溝2	弥生土器 須恵器、土師器 碧玉製管玉、石杵	弥生時代中期の 集落・墓域 朱の付着した石杵

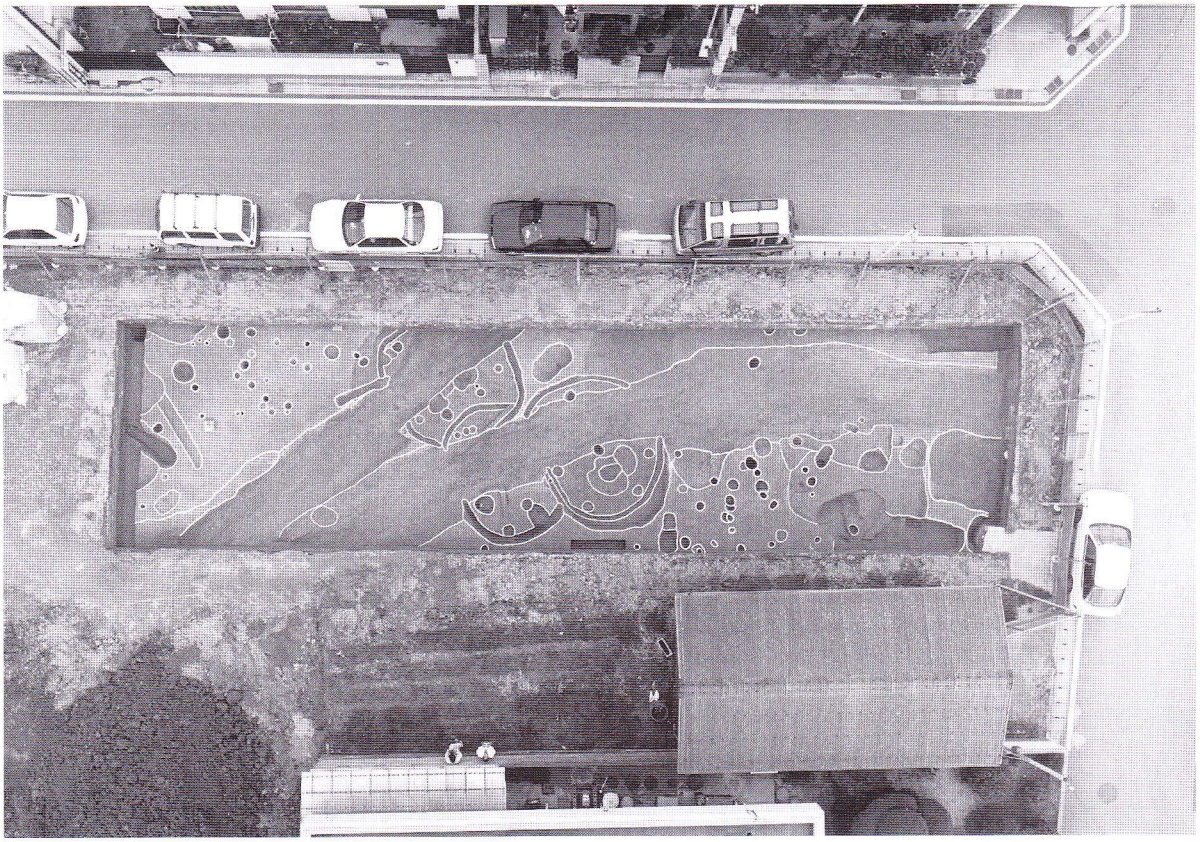
図　　版

調査地近景（東から）

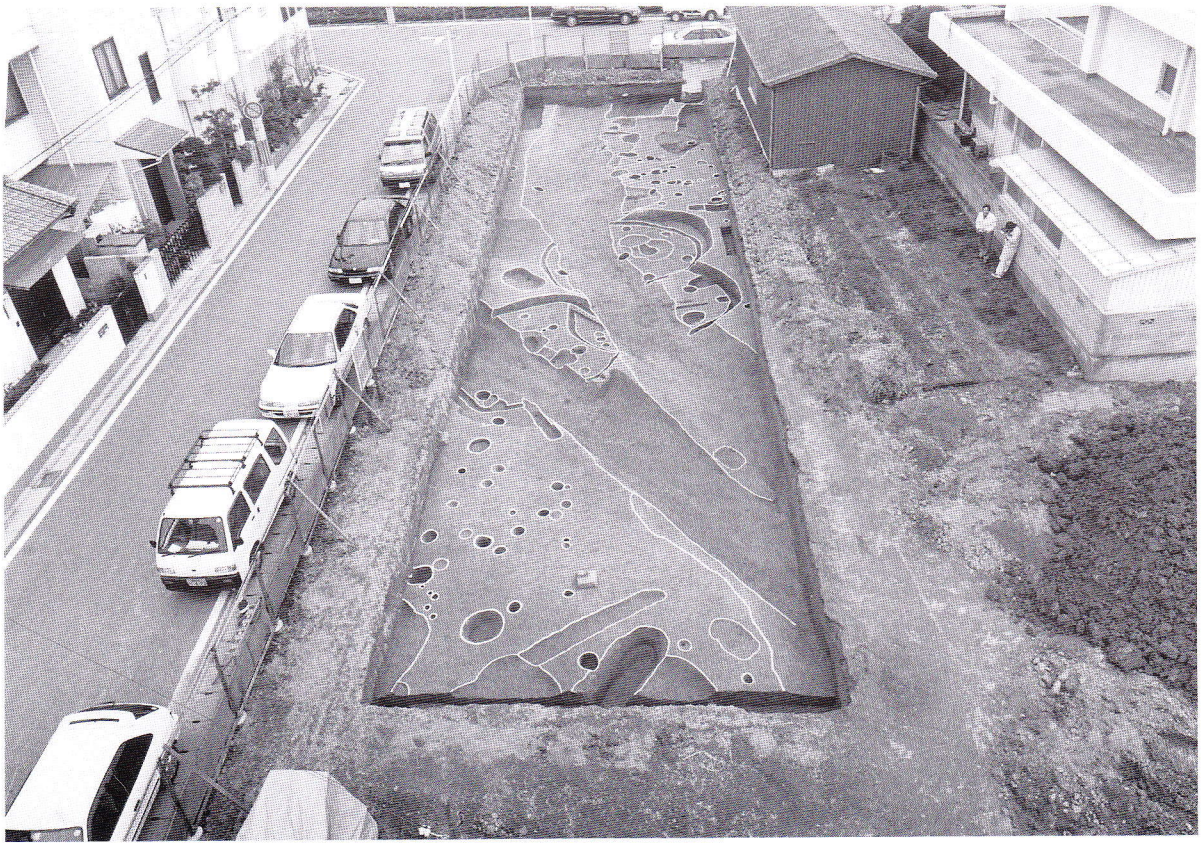


調査地近景（上が北）

図版2

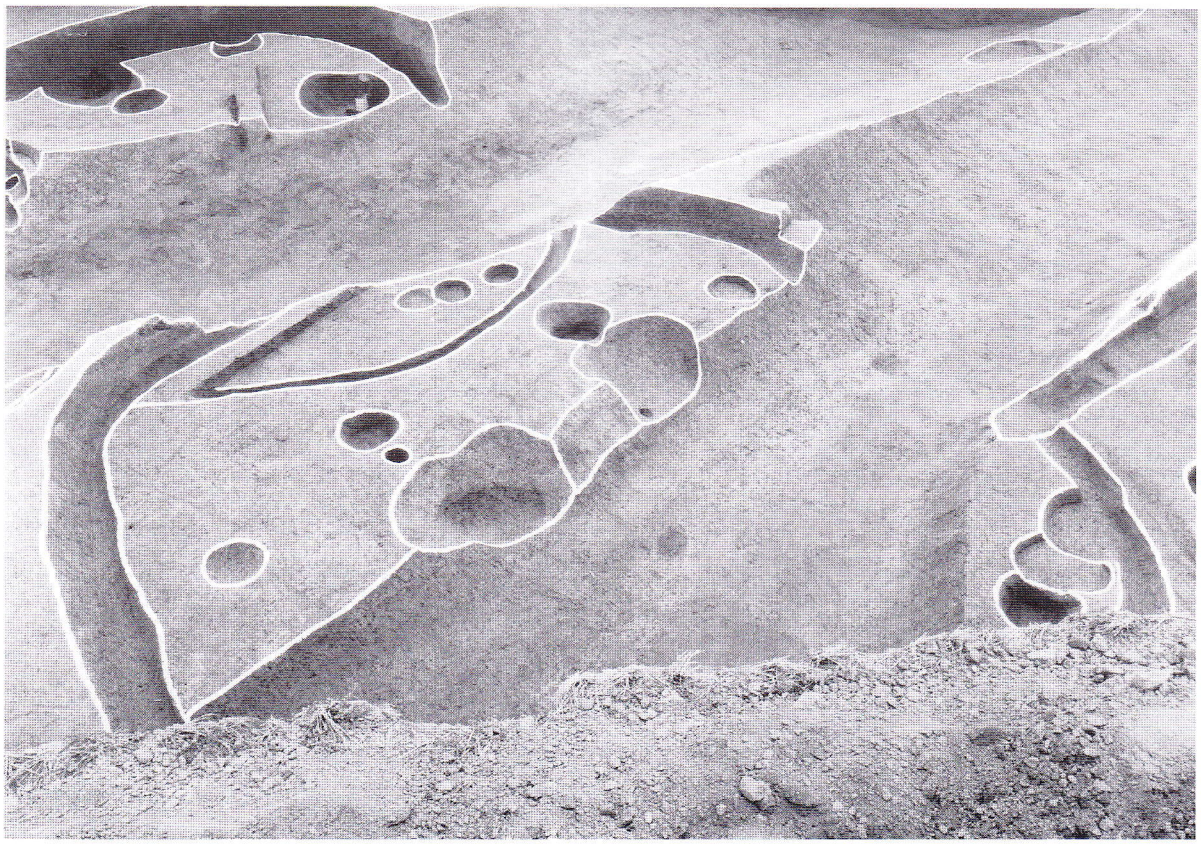


全景（上が北）



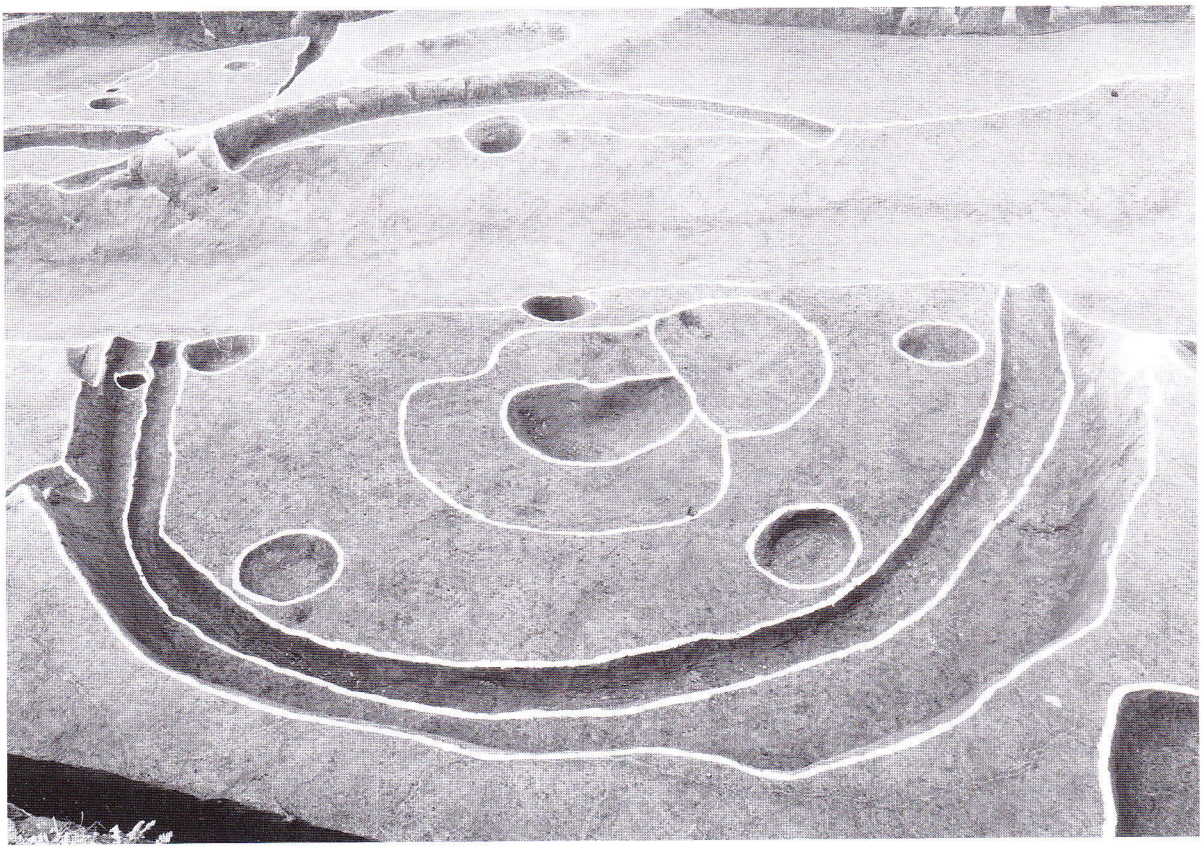
全景（西から）

SB-1周辺（上が北）



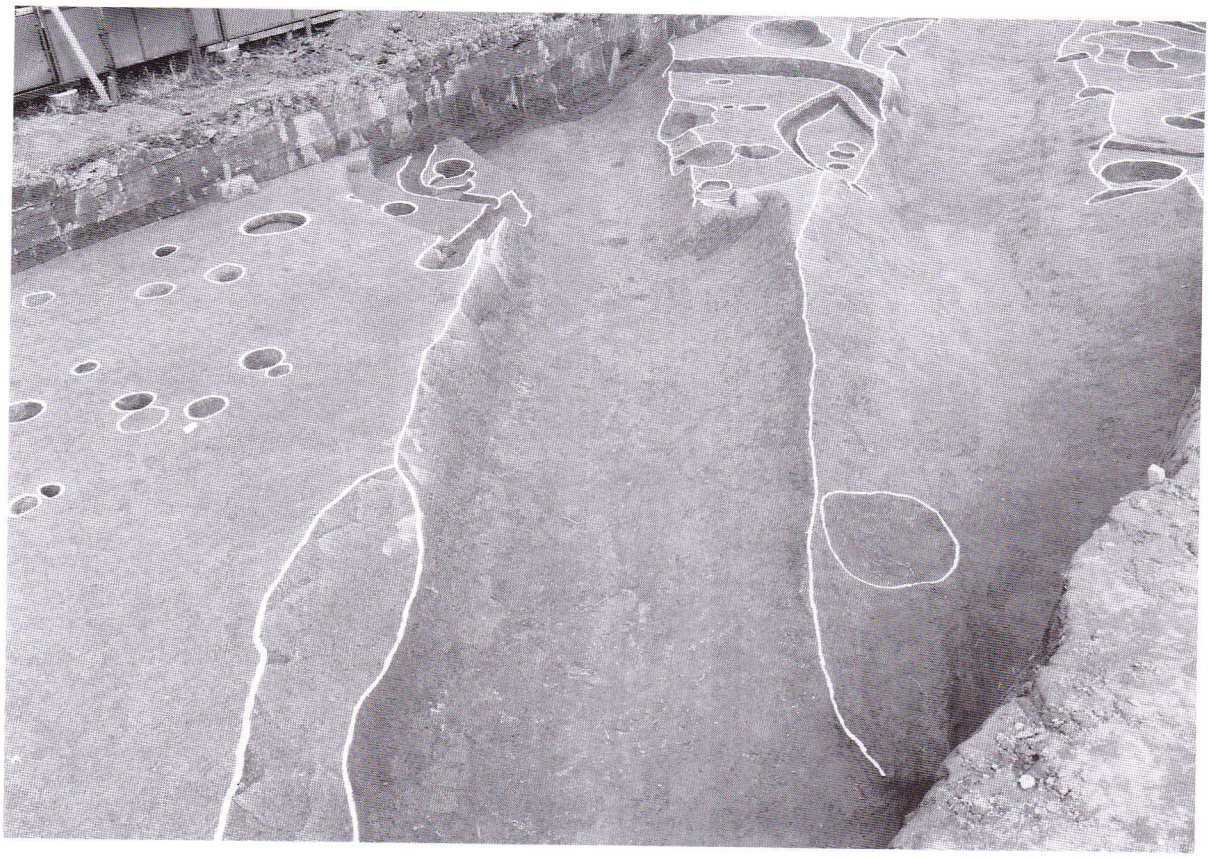
SB-1（北から）

図版4



SB-3（南から）

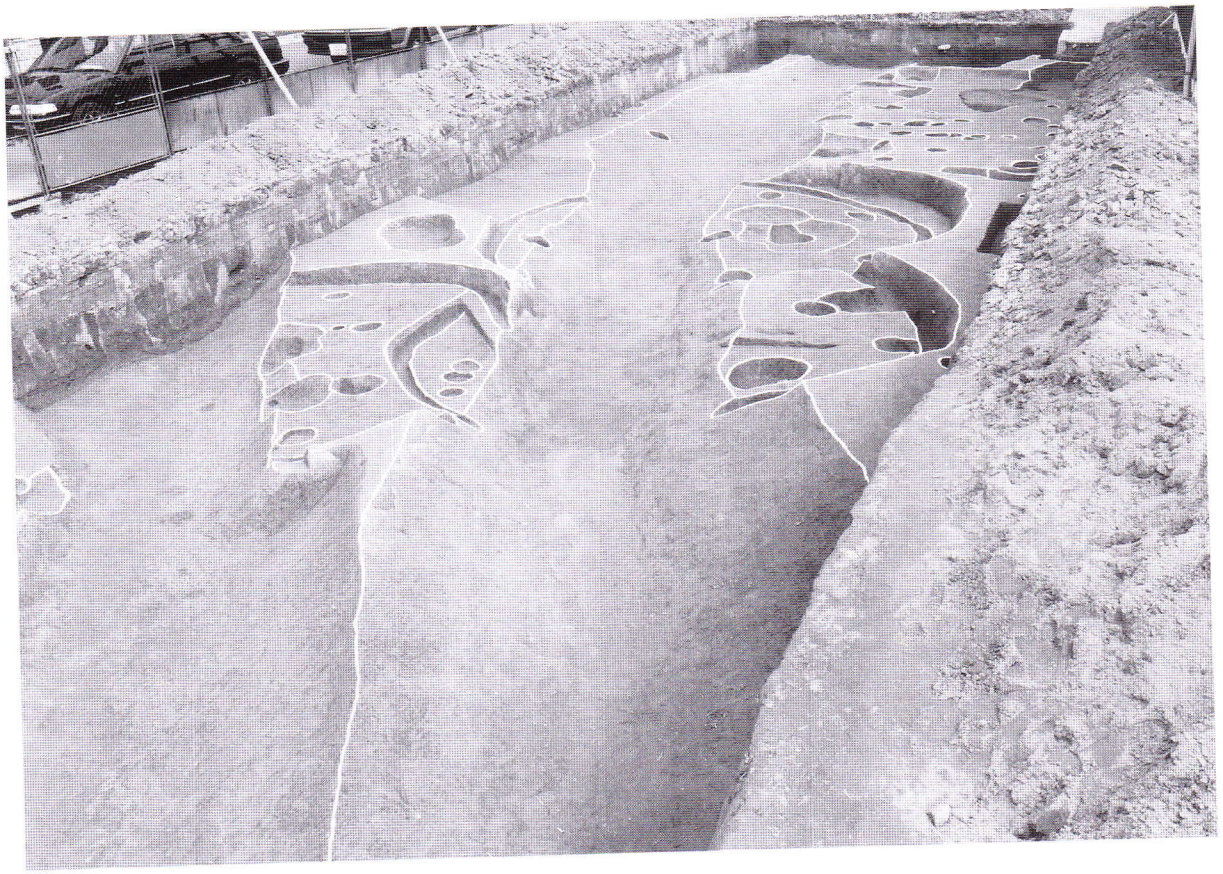
SB-4（南から）



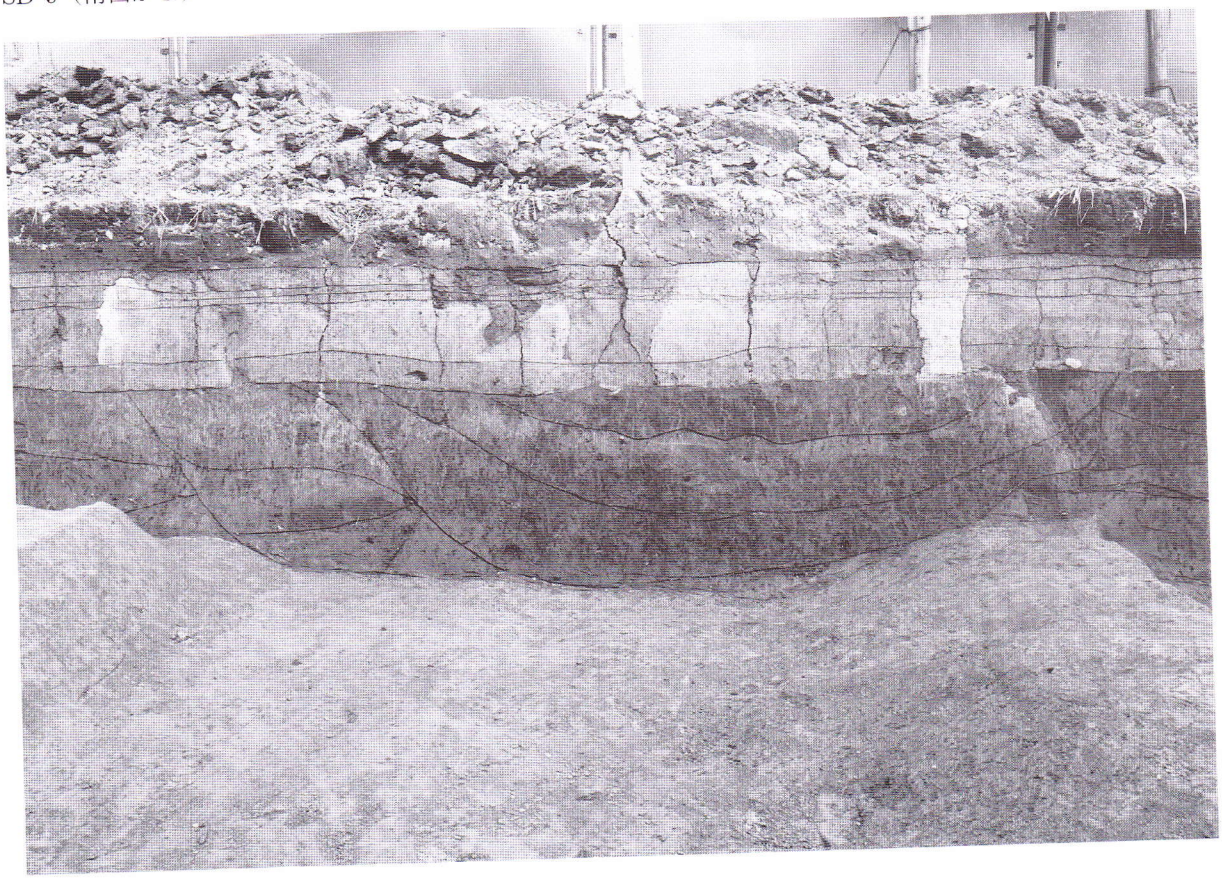
SD-6（南西から）

SD-6土層堆積状況（南西から）

図版6

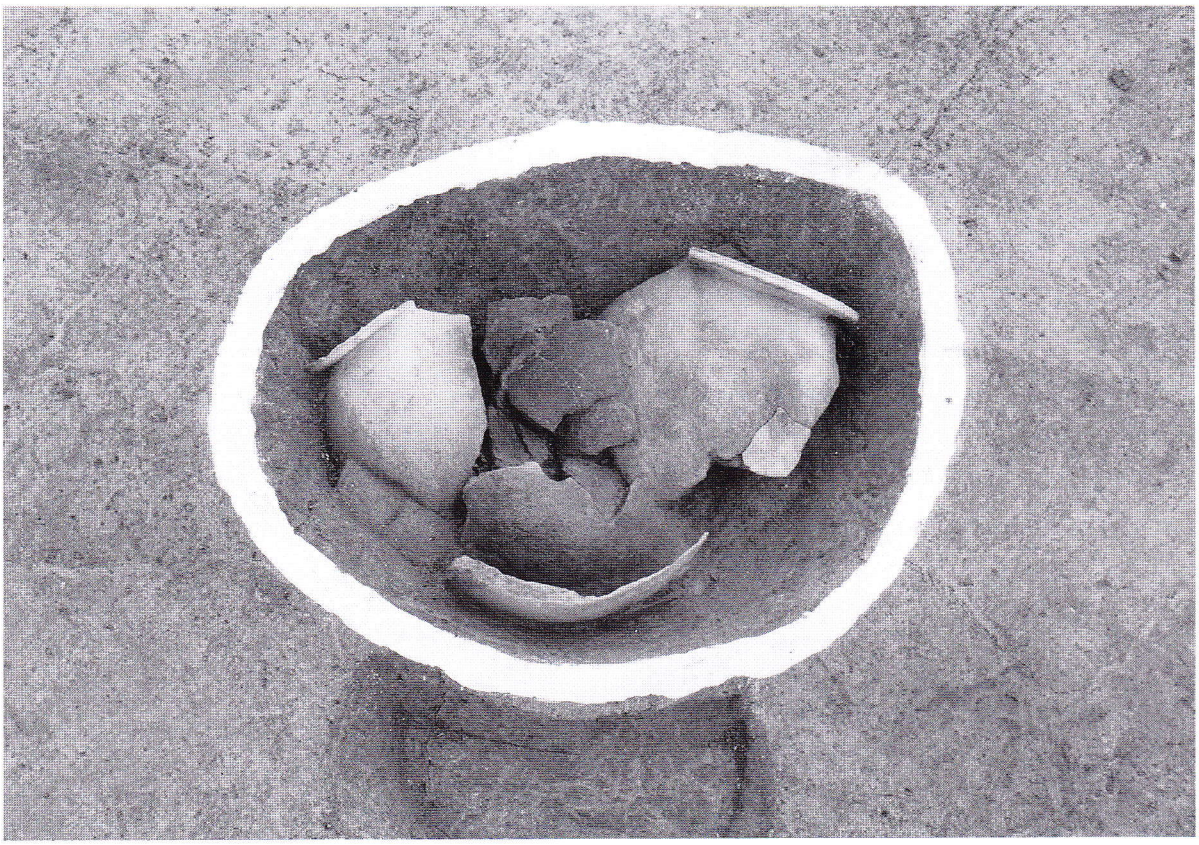


SD-9（南西から）



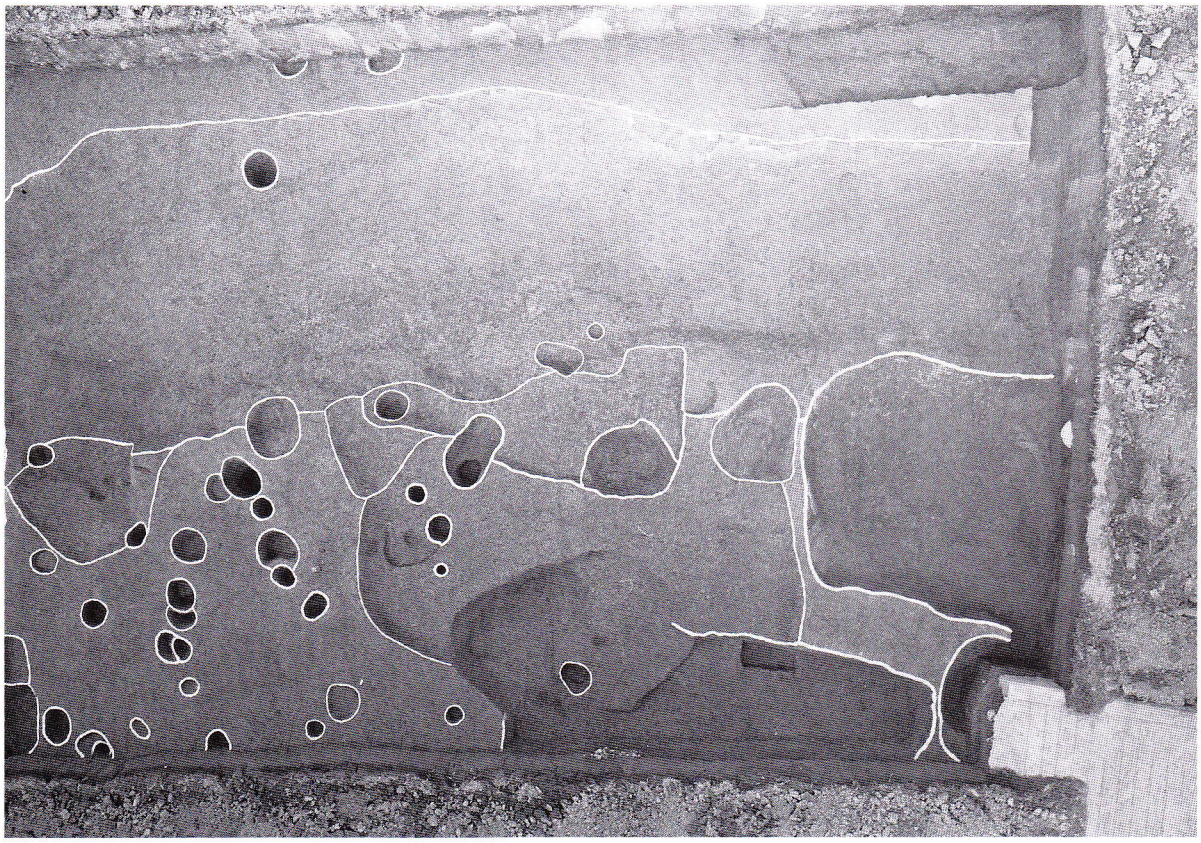
SD-9土層堆積状況（西から）

SD-8土層堆積状況（東から）

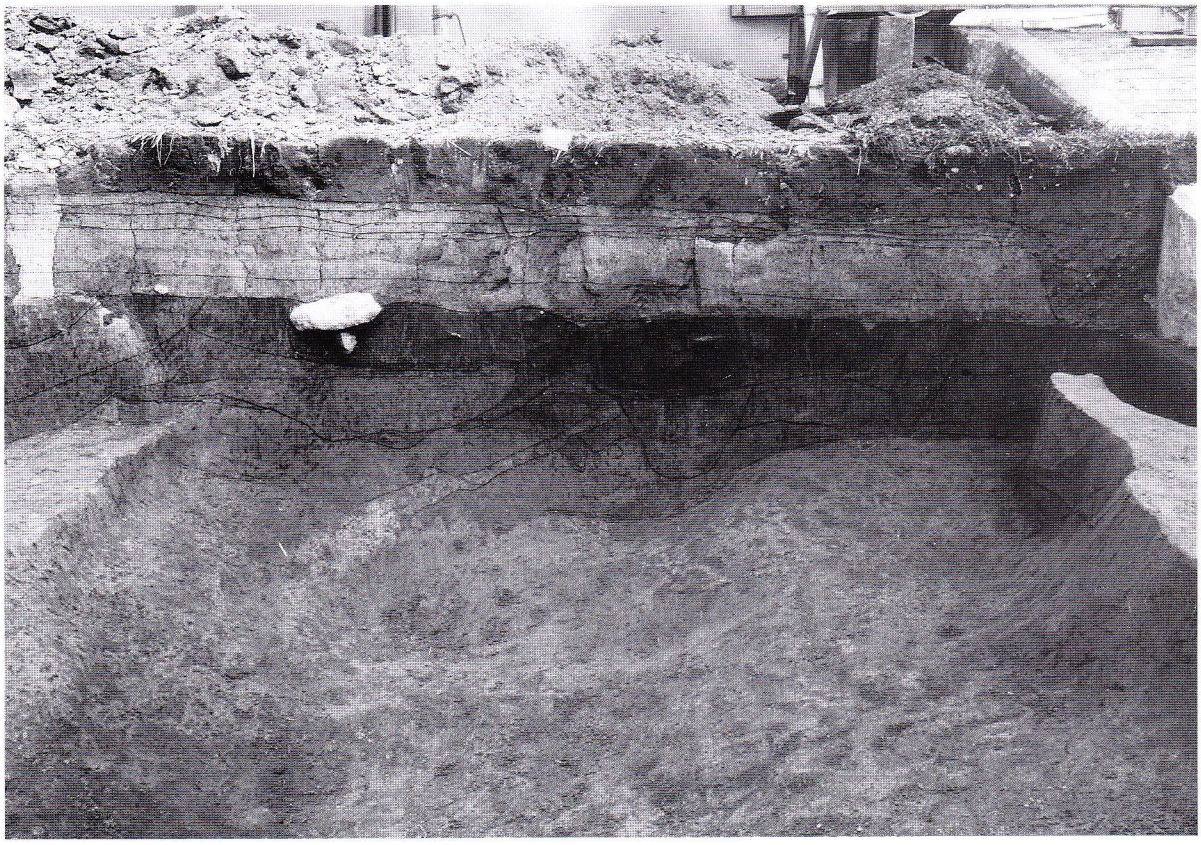


SX-1土器検出状況（北から）

図版8



調査区東側SK-1周辺（上が北）



SK-1土層堆積状況（西から）

2

SB-2出土遺物　2直口壺

3

SB-2出土遺物　3広口壺

4

SB-2出土遺物　4鉢

5

SB-2出土遺物　5鉢脚部

9

SB-4出土遺物　9直口壺

10

SB-4出土遺物　10広口壺

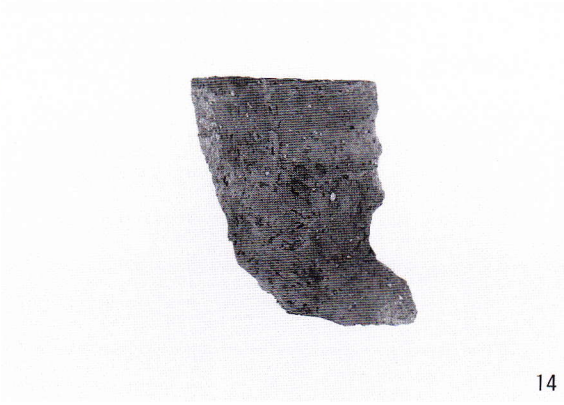
11

SB-4出土遺物　11甕

12

SB-4出土遺物　12底部

図版10



14

SB-3出土遺物　14細頸壺

15

SB-3出土遺物　15広口壺

16

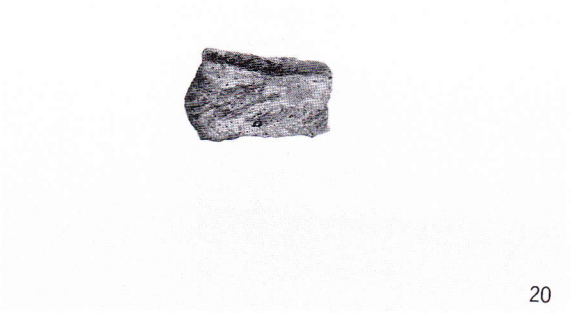
SB-3出土遺物　16広口太頸壺

17

SB-3出土遺物　17細頸壺把手

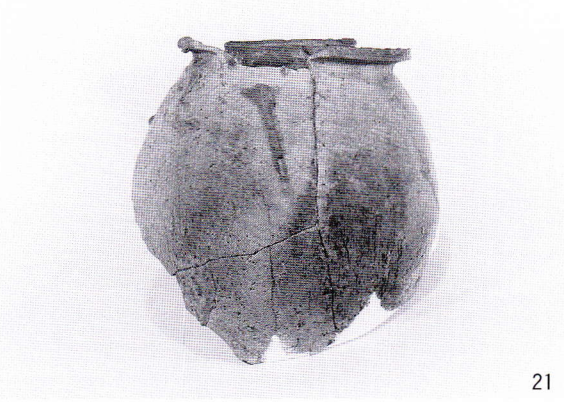
19

SB-3出土遺物　19甕



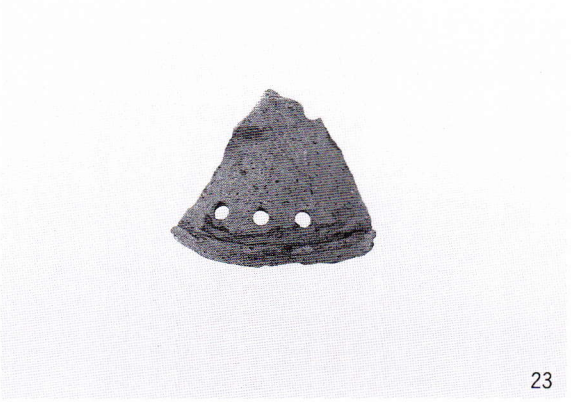
20

SB-3出土遺物　20甕



21

SB-3出土遺物　21甕



23

SB-3出土遺物　23脚部

26
SD-8出土遺物　26直口壺

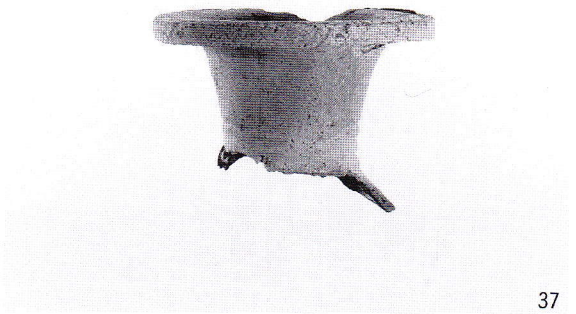
30
SD-6出土遺物　30広口壺

32
SD-6出土遺物　32甕

34
SK-10出土遺物　34底部

35
P-106出土遺物　35直口壺

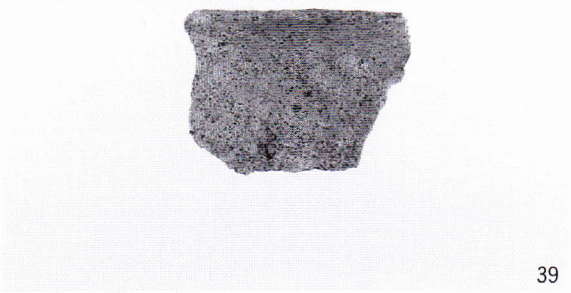
36
P-32出土遺物　36直口壺



37
SK-6出土遺物　37広口壺

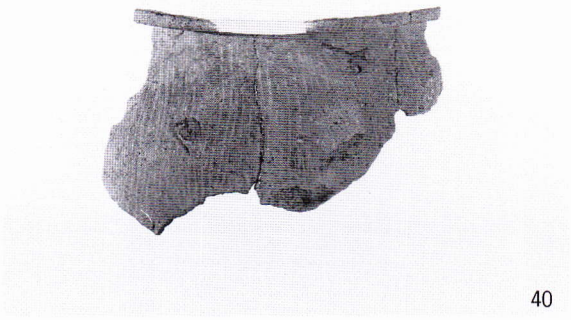
38
SK-11出土遺物　38広口壺

図版12



39

第8層出土遺物　39甕



40

SK-1出土遺物　40甕

41

SX-1出土遺物　41甕

45

SK-6出土遺物　45鉢

47

SD-9出土遺物　47壺

48

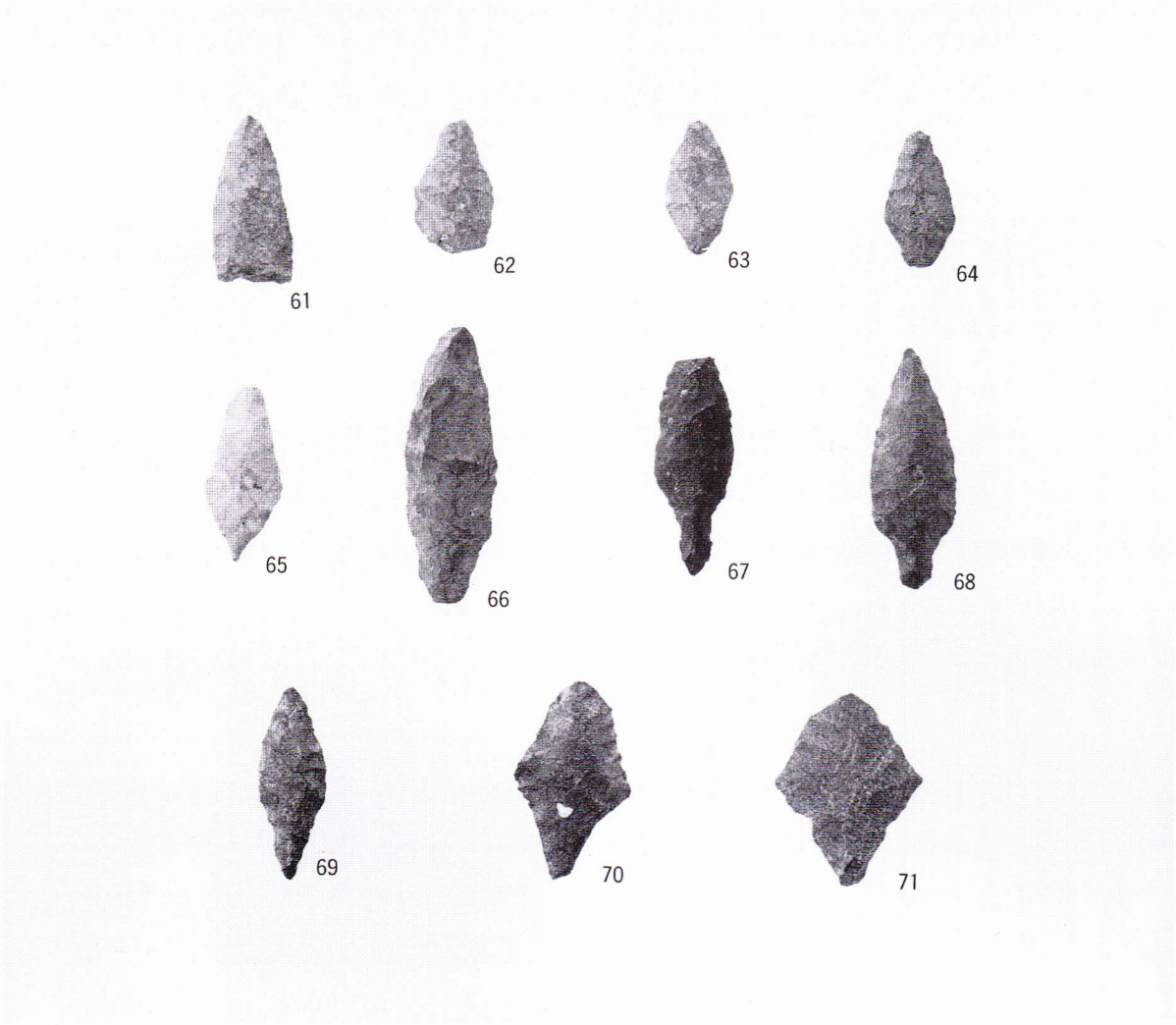
SD-9出土遺物　48壺

54

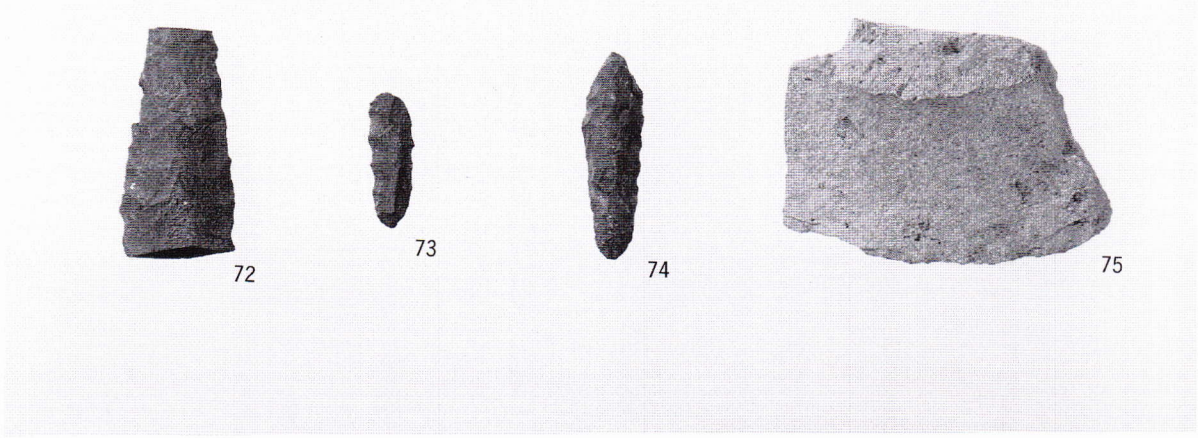
SD-9出土遺物　54高杯脚部

59

SD-9出土遺物　59須恵器蓋

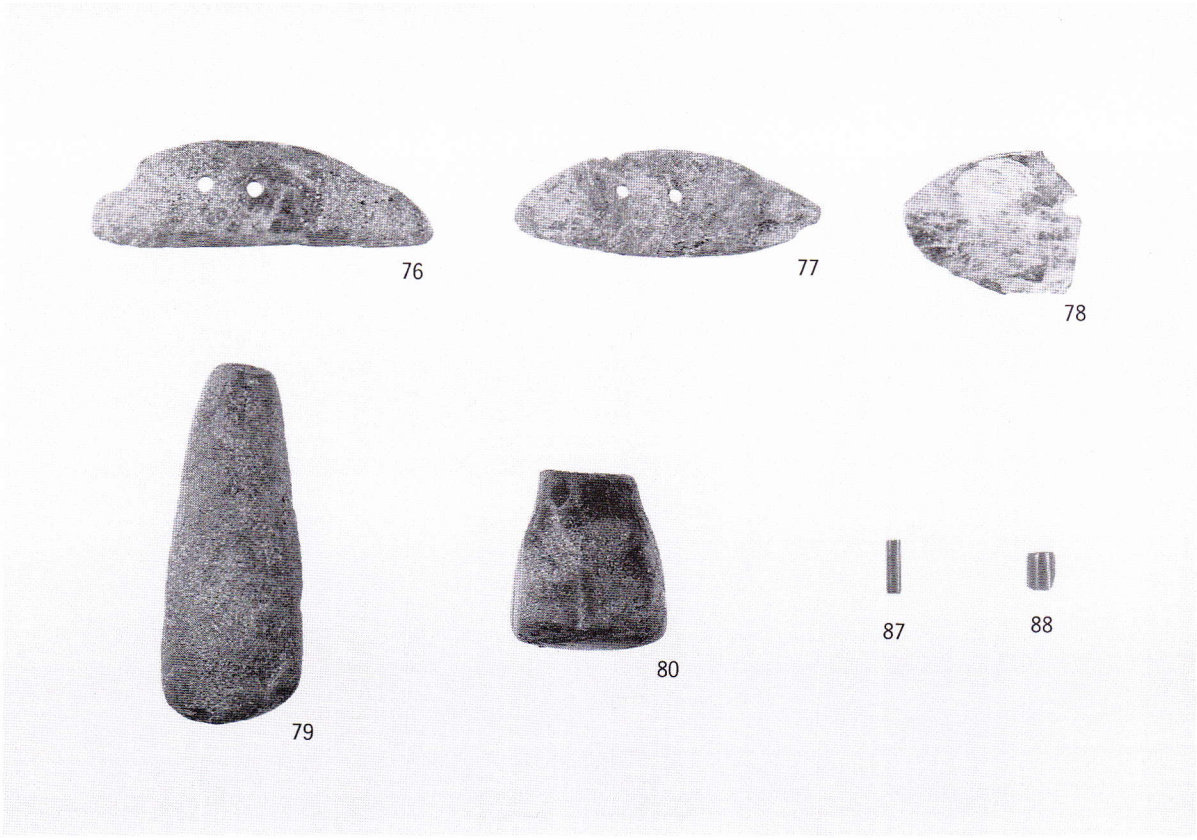


石鏃(61平基式・62凸基Ⅰ式・63～66凸基Ⅱ式・67～71有茎式)

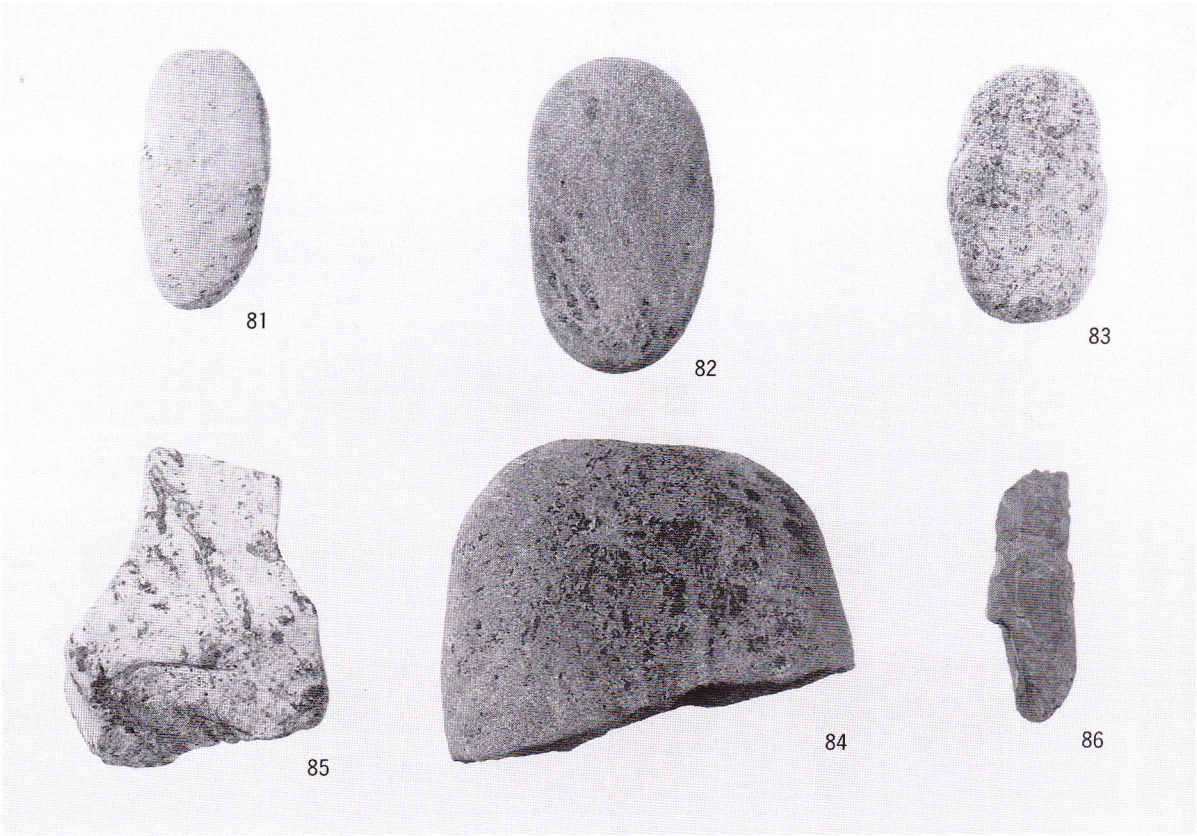


72石槍状石器、73・74石錐、75スクレイパー

図版14



76～78石包丁、79太型蛤刃石斧、80石杵、87・88管玉



81～83叩石、84凹石、85砥石、86不明棒状石製品

平成10年３月31日発行

太田・黒田遺跡 第43次発掘調査概報

編集・発行　（財）和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　中央印刷株式会社

© （財）和歌山市文化体育振興事業団 1998